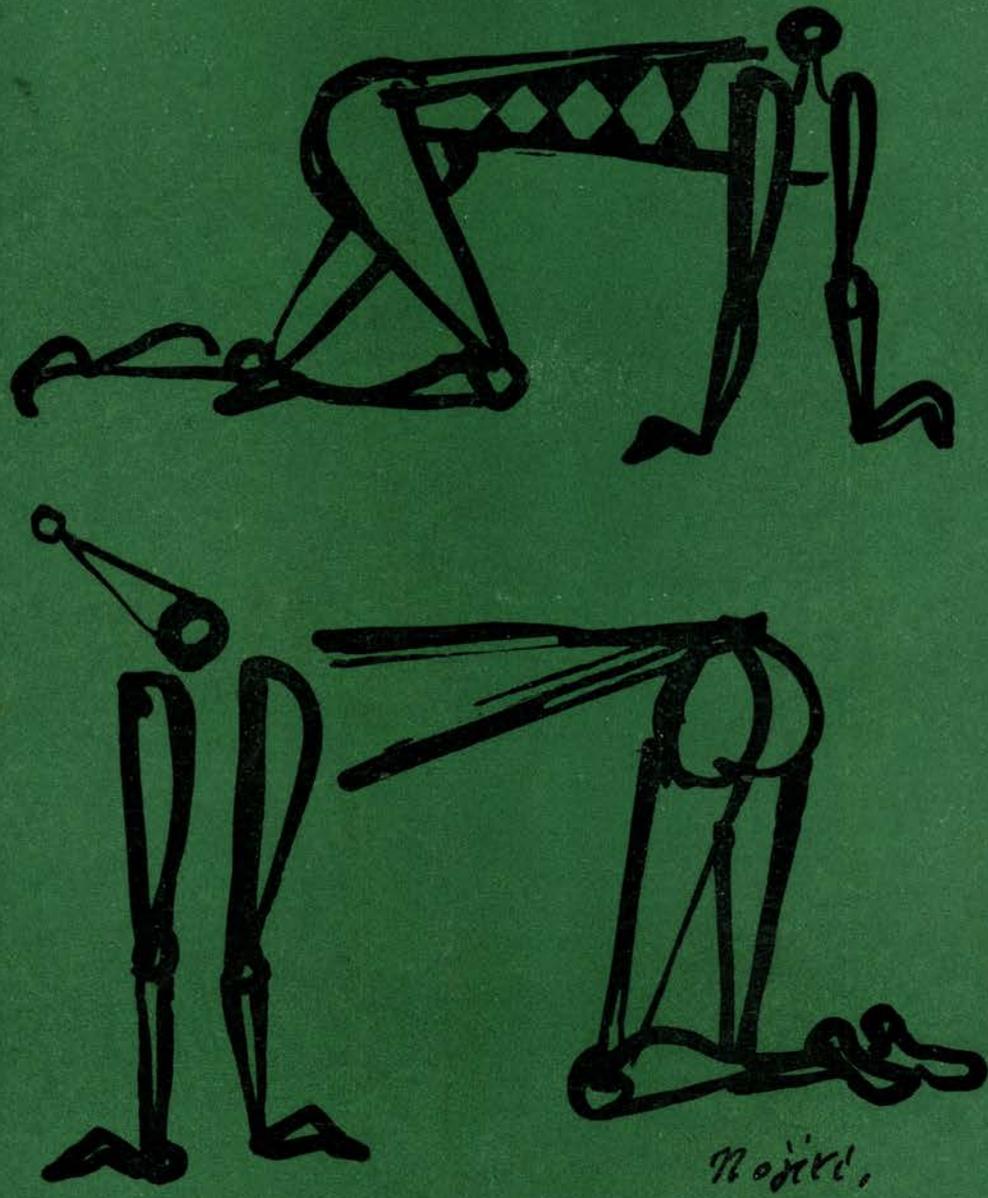


川柳の雑記



麻生路郎☆主宰

十一月號

No. 378

No. 378 Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

文化の夕

日時 十一月七日(金)午後六時
場所 光明寺 (電話0926600)
大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前
(市電下寺町又は日本橋三丁目下車)

兼題 「忠者」(三題) 麻生路郎選
(この中1つは半年賞)

「和服」(三題) 土井文蝶選

「日記」(三題) 富岡淡舟選

「デザイナー」(三題) 佐野白水選

席題 三題(当日発表) 川村好郎

柳話 川村好郎

呈賞 ☆各題天位 ☆路郎選天位に不朽洞賞

会費 五拾円

幹事 紫香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・庸佑・狂二・与呂志・白水・水堂・月都・薫風子・永断・二三夫

★ 投句だけの方は郵券三十円
同封(切毎月五日)
大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電話住吉06081番

忘年句会の兼題
赤字・宴会
鼠・寒空

秋にひらく (第2回) 短詩文学作品展

会場 大阪美術倶楽部(東区今橋二丁目塚筋西入)
(電話096200番)
会期 十一月八日(土)九日(日)十日(月)三日間
—(会員は別室で粗茶の用意もしてあります。)
—(午前前十時 至午後六時)
作品 短歌・俳句・詩・川柳作家新揮毫作品
(半折・横物・色紙・短冊其他)
価額 売約に応じます。会場係に御申出下さい。
盟 文学連 社 教育委員 会
後 市教 員 会
大 阪 市 教 育 委 員 会
川 柳 雑 誌 社

日本盛酒坊

東京 酒坊 八重洲 日名店街
大阪 酒坊は
大阪市南区九郎右衛門町に新築中
(紙竹屋西ノ辻道頓堀橋南詰北西角)

明春一月末新築完成の予定でございます。まず、ミナミの新名物として、堂々開店の節は何とぞよろしくお願ひ申上げます。



二ホンサカリ

灘の清酒

西宮酒造株式会社



短詩街

プロミナード

麻生路郎

今から三十五年ほど以前のことである。本誌の投句家に川柳のうまい美代子というあどけない少女があった。大人の作品よりも遙かに詩情があふれていたし、狭い視野には達しないが社会を批判した句もあった。その作品の一端を「川柳雑誌」の十三号及び十八号から抄出して見よう。

ひるまでにお琴をすます
日曜日
自慢して片足溝へふみはづし
コスモスよ散ったらお前
どうなるの
いちびっている子がきつ
と怪我をする
また今日も先生宿題出す
つもり
死ぬ死ぬという人私いつ
ちいや

学校で今日もまた筆の頭飛び
いいことどうせ先生に告げるから
しってるわスペクトルム
というのでしよう
この虫はほらりんりんとして啼くでしょう
当番の日はピンポンをして帰る
噴水へちらちら銀のような月
まだ時間あるわ鉛筆けづり
しまししょう
時計まで私まだまだ背がたらず
ああ私また級長にされたのよ
先生の留守お蚕の箱を出し
ラジオだと見さん火箸さかにさし
あら雲雀やっぱし雲の上

で啼き
わるいとは知りつつ豆の葉をちぎり
まあ土筆取るとてあんなすべりよう
あらあなたかて見てごらんお福だわ

これ等の句を読まれた時に、この少女の詩情の豊かさ純情さに驚かない人はいないであろう。当時数えの九つぐらいとすれば今では四十二、三になる筈だ。一ペン会って見たい気がする。

ことしの大阪市の市民文化祭に関西短詩文学連盟の詩の部の「詩の会」が読売新聞社の四階の広間で催されたが、その時に入選したこどもの詩に次のようなのがあった。

題は「このごろ」で作詞は安永日出夫という小学生であった。

おとうちゃん
道徳教育にはんたいする先生は
あはやといたつた
おあちゃんも
そやそやほんまやといたつた
ほくがなんでやと怒つたら
弟もなんでやねんといつしよにいいました

するとおとうちゃんもおあちゃんも
その口がなまいきや
しゅうしんがないとあかんあと
ためいきした
ほくはこのころテレビニュースを見ません
先生とけいかながけんかしたり
なんやけつたいな気持ちです
おとうちゃんもおあちゃんも
きげんが悪くなるので
ダイヤルをまわして
ニュースは見ません
実に自由に、いいたいことを云っているではないか。こどもの頭に斯ういう風、今の社会が遣入って行くのを知ると、政治家や教育家の責任の重大さを思わずにはいられない。

こどもは純情そのものである。その純白なところを汚さない政策と指導がなければ次代の国民がどんなものになるかは云うまでもないであろう。

尤も、こんな詩ばかりではなく、非常に豊富な空想を働かせた「インキ」などが選ばれていた。数十年前の少女の川柳と近ごろの少年の詩とを比べて見て深く興趣を覚えたのであった。

一九五八年十一月

十一月号目次

題字……………麻生路郎
表紙：「はら」野尻弘

短詩街プロミナード……………麻生路郎……………(三)
医者稼業お脈拜見……………(四)

生々庵・珊枝郎・瑞川
一哲・太希志・無名林
阿茶

源頼家に関する川柳……………大村沙華……………(四)

新川柳鑑賞……………麻生路郎……………(四)

亜鈍氏の詩川柳を衝く……………西川晃……………(六)

川柳歳時記……………水谷竹荘……………(六)

須崎豆秋論……………高鷲亜鈍……………(六)

柳眼……………直原七面山……………(六)

川柳のライバルさん……………内藤きさ子……………(六)

師直の恋……………富士野鞍馬……………(六)

我等の支部長……………酒井ひか平……………(六)

柳風三國志……………東野大八……………(六)

文化祭市民川柳大会……………(六)

一句を語る……………(六)

春菓・没食子・多久志
梅里・木客・摩天郎
潮花

川柳になりそうな話……………三栗夜城……………(二四)

★ 川柳塔……………麻生路郎選……………(八)

同舟近詠……………諸家……………(二)

近作柳樞……………麻生路郎選……………(二)

北川春果選……………(二)

一路集〔女子大〕……………戸田古方選……………(三四)

靴磨き……………友淵貴山選……………(三四)

〔風〕船……………杉谷湖山選……………(三五)

金泥集……………麻生路郎選……………(三三)

入門講座……………(三三)

研究願……………戸田古方……………(三三)

各地柳壇……………(三四)

不朽洞会から……………(三九)

柳界展望……………(三八)

青ペン・赤ペン……………(三八)

ところが方角がいいと言って来た人がありま
したよ。

A — 三十年ほど前、順慶町に、ウチは
方角がわるいから他のお医者さんへ行きな
さいと、患者を追い返した医者がいました
よ。

E — 私の若い頃の話だが、患者と話を
しながら治療していたのですが、うっかり
右の耳がわるいのには左の耳へ薬をさしてし
まった。(笑) ハッと気がついたが、その
場はそのまま、患者も気がつかないまま帰
えらせたが、一時間ほどして電話がかかっ
てきて曰く「先生、わるいのは右の耳なん
ですぜ」(笑) 耳の方角がわるかったんだ
な(笑)。

B — もう君のそこへ行かんぜ。
A — 一哲さんの句に、
誤診して菓子折りもらう時もあ
り (一哲)

誤診もつみ重ねていって名医となる道程
なのだが。性こりもなく誤診ばかりするの
に、非常によく流るる医師がいましたね。
D — 神ならぬ身の名医にも誤診はあり
ますよ。ただ名医とヤブ医とは誤診振りが
違います。

E — よろこばれる誤診をすることです
な。

A — 太希志さんの句に、
せめてもの虚勢子供を医者にす

る (太希志)
と、いうのがありますね。医者の実生活
を、ちょっとふれてくれませんか。

D — ちょっと見たことは医者って楽に
見えるようですが……。
E — 臨終に立ちあわぬだけでもお寺さ
んのほうがいいね。

C — 医者って、フンゾリ返って、タバ
コをスパスバ吹かしていたらいいように思
われているが、今夜の句にも、
— 医者稼業食わねど高揚技とはゆ
かず (端川)

とか、
— 小きさみに単価で暮らす医者稼
業 (生々庵)

と、いう句が抜けているように、子ども
達も医者にはなりたくないようです。
E — いくら稼いでも、三人子どもがあ
って、その三人の中の一人か二人を医者に
するなどは、現在の開業医では大変むずか
しいことだ。医者になると食いはぐれがな
いと思われているだけで、実際やっている
医者稼業がそんなに楽じゃねえことは一般
にあまり知られていないようだね。

F — よう流るる歯医者を知っています
が、流行れば流行るで忙しいので、そこ
とこの子はみな親の業を継がんと言うてま
した。

E — 昔のような医者はいなくなつた
ね……とにかく働ける間に産を成さねばな

らん、そうしないと老後が楽にはならぬ。
つまりカネを残さねばいかんということに
結論されるかな。

C — ところがそれが残らん。
A — 子を一人医者にするにしても父の
負担は大変なものだからな。

C — 兼屋さんには勝てん。
E — 兼屋さんは儲けてますよ。
C — しかし、これでいいのかも知れ
ん、われわれは、われわれの職を行くよう
に、路郎先生が川柳をされているように
ね。

A — 阿茶さんの句に、
— 性病へ仲裁もして医者稼業 (阿茶)

と、いうのがありますが、医者が性病へ
どんな仲裁をするのですか。
F — まあご主人が性病をも
らってきて、それを奥さんに感
染させる。奥さんはそれを診て
もらって始めて知ります。さあ
怒りますがな、そんな時の仲裁
もあります。まあ、なだめ役で
すな。それからご主人が治療に
きて、奥さんがそれと勘づく、
そつと、「主人の病気はなん
ですか」とときに来るのです。せ
やけど、それは医師としては言
えませんが帰えします

が……。
C — それはイカン、そんなことを言
えば、言えん病気ならハハン、あれやなど
気がつきますよ。(笑)

F — こんなのがありました。ある中
学校の教頭さんですが、それが健康保険で
来て(笑)。保険証へ病名を書き入れてし
まっては、後で奥様やお子さんが医者にか
かる時、困るやると相談してあげたのに、
その奥様は「かまいません、ハッキリ病名
を書いて下さい」と言うのです。エライや
きもちですな。どつちにしても治すことが
先決問題と言うて、夫婦喧嘩の仲裁もせ
なアカンのです。

A — 親友の尾崎方正医博の句に
— 風邪ですと言うて皮膚科に通っ
てる (方正)

と、いうのがあります。またこんなケ

**結婚式場
長生殿**

神殿(2)控室(16)宴会場
(和洋)御待合室・更衣
室・美容室・写真室の
ほか貸衣装一切を完備
しております ●6階

金曜
定休

松坂屋

大阪日本橋三



スもありませう。夫婦連れで診察にきて、奥様が旦那さまに逆に感染させた話ですが、ご主人が不在勝ちで、その留居中に奥様が病気をもらったことがわかった。

D—耳鼻科にはお色気がないように思われますが、次のような色っぽいところを一つ紹介いたします。中年の二号さん風の婦人がきて、「歯をのみ込んだみだりなで診て下さい」と言うのです。で、どの歯をのみ込んだのかと思って、口を開けさせてみると、美しい歯がきれいに全部揃っているのです一本のみ込んだ歯がない。

E—なるほど。入歯をのみこんだわけですね。(笑)

C—歯がきれいに揃っているのに歯をのみ込んだ人を診る。耳鼻科というものは推理的頭脳が要ります。(笑)

D—そこで出来た句が

御主人の歯をのみ込んだ二号も
居 (一哲)

それからまたこんな、いたいけな少女にまつわる話もあります。これは、あの人と云えば、あああの人かといわれるほどの名望家のお嬢さんに、八才と十二才になる子どもさんがいますが、それが扁桃腺がわるいと違って両親につき添われてきたのですがね、それがどうでしょう梅毒性扁桃腺なんですよ。

F—どこかでうつされたのですね。

A—銭湯でも病気をもらってるといふことを聞きますからね。

D—奥様が先天的梅毒だったことがわかりましたがね。

A—プラス三つで面白い話はありませんか。布施筑川医博の句に

——謹厳な彼も人の子プラスなり

(筑川)

と言うのがありますが、ここへお集りの先生方も全部強制的に調査してみたらどうだろうね(笑) 面白い成績が出るかも知れんね……(笑)

F—それは言い出しつ尻(べ)のあんたから初めたらどうですか(大笑)

D—患者は血液検査をされること何かこう、侮辱をされたように思うようですね。ある銀行に勤めている娘さんにレントゲンをかけて次に血液検査しようとしたところ、その母親というのが頑としてきかずその果には抗議までするので。わたしの家筋は血液検査をされるような、そんな血統ではございません。(笑) 血液検査と血統調査とをゴッチャにして考えとるんですよ。(笑) そしてその言い草がふるつとるんです。私は現在こうした生活はしていませんが、わが先祖は青砥左衛門藤綱の血を続く家柄ですととき。(笑) これには参りましたな。(笑)

○

A—開業していて何か怖しい目に遇ったような経験はありませんか。

D—香川県での話ですが、ある夜、急患だから直ぐ来て下さいというので、その

の使いの者と出かけたところがね、ある峠にさしかかかって人々の気のないところを見計らって、身ぐるみおいて行くと、やられました。むかしの医者は金時計の一つぐらいは持っていましたからね。これは計画的ですよ。

A—私の場合は無事に助かりましたが、ある思想家から電話で直ぐ来てくれというのです。馳けつけてみると、先方では、お呼びいたしませんというので

す。「これは先生、危い。早くお帰りください」と、私より先方のほうがあわてたものです。これは道で待ち伏せでもするつもりだったのでしょうが結局無事でしたが帰宅するまではちよつと気味の悪いものでした。

○

A—長崎柳秀医博の句に
——妻や待たん往診断わらん

(柳秀)

というのがあります。医者稼業のなかで、ときには妻とゆつくり、どこかで御飯でもと思っていたのに、次々と患者がきたり急患があったりして、きょうもそれが出来なかった。これは医者でないといわからな心境ですね。

C—医師も人間だから、せめて今夜だけは、ゆつくり寝たいと思うこともありませう。寒い夜なんか一杯飲んで床へ入ると、

新児童音楽サークル

募集

バイオリン科・アコーディオン科・ピアノ科・チェロ科・ギター科・声楽科・音楽教育科

講師

ト徳子行弘
一 眞
生 ア 辺 田
麻 德 渡 坂 市

大阪放送音楽専門学校出身
大阪音楽大学出身
大阪放送音楽専門学校出身
毎日放送専

試入科(夜間)も設けています。詳細は当教室で後開講をお求め下さい。

奈良県生駒市本町2丁目103番地(若月)

申込所 新児童音楽サークル
電話 生駒 2 7 番

塗端にけたたましい電話のベルの音だ。つらいと思ってもこれは放つとけないから馳けつねねばならない。歳をとると夜中に一度目を覚ますと、こんどはなかなか眠れないもんだ、仕方がないからギョッとコップで一杯ひっかけるが、顔だけ赤くなつて酔いもしないし、眠れもしない。こんな苦勞は人様にはわからない。と、言つて、先生お世話になりましたと、ビールの一ダースも持つて来ないもんだよ。(笑)

D—バトロール・カーの乱用も困りものです。中座とかで芝居を観ていて急に悪くなつたのを、そつちへ連れて行くから用意を待っていてほしいという電話がかかってきました。ご承知のように耳鼻科なんかでは、別に宿直医というような人をおいていませんが、私のほうは患者に迷惑をかけてはすまないと思つて誰かを残してお

くようにつとめているのです。やがてパトロール・カーが来ましたが、カルテや届け書などで少し時間がかかったら、なぜ、もっと早くしないのか、病人が着いたら直ぐ仕事の出来るようにしておかないとダメじゃないか、というような言い方なんです。ね、病人をほり込んでしまえばパトロール・カーのほうは責任がないが、私のほうにしてみれば、天王寺あたりのルンペンだったら金もとれない。それなのに、おそいか何とか文句だけは言う。まだその上にこんなことからやらないぞ、なんて捨てりふを残して行く。常識も何もあつたもんじゃありません。来てやらんなんて言って帰つたが、やはり赤十字からも警察病院も国立病院からも来ます。まったくパトロール・カーの乱用には困りますよ。

A — 酔っていてヒヤッとしたようなことにはありませんか。これは一度本社句会での柳語で、話したことがあるのですが。私の友人のある医者が、相当に酔って帰つてきたところへ患者から呼びに来たのです。ね、断わることも出来ず、とにかく急いで往診して帰ったのですが、それはチフテリアだった。夜中フト目をさまして考えてみるが血清をしたか、どうか、それがハッキリ記憶にない。さあ、そうなると心配で寝られない。夜の明けるのが待ち遠しく、朝一番にその家へ飛んでいったものです。まず太腿（もも）を開けてみた。そこにはチフテ

リヤ血清注射特有の大きな絆創膏が貼つてあつた。医者としての良心が、やれやれと思つたのです。患者側から言わせると、あんな親切な良いお医者さんはない、よほど病人が気になるかして、呼びに行きもしないのに朝早くから見舞ってくださった（笑）。だから良心的職業意識というものはエライものだと思つておりました。いくら酔つてはいても、急所だけはつとめています。こんな事情は患者さんには判つてくれない気持だろうね。私にもこれに似た話があるのです。もう三十何年も前のことですが……病院に一人要注意という患者があつていつも気にしていたのでしようが、夢を見てね、その夢の中で直ぐ診に来てくれというのです。夢が現かはつきりせぬまゝいそいで行ったものです。患者のほうにしてみれば真夜中でも様子を診に来てくださったと、御熱心な先生を非常によくこんでくれました（笑）。

E — 純情なお医者さんですね（笑）
A — 太希志さんも、お酒の好きな方ですが、もし、あなたが酔はらつて寝ているところへ急患があつたらどうしますか。
G — 以前にもそういうことがありましたが、どうしても往診に来てくれと言つたので、実は今夜はこれとお酒酔つていたのでダメだと断わると、断わる口実とでもとつたのかせひお願いしますと言つたのです。で、仕方がないから、誤診覚悟なら行きま

しょう（笑）で出掛けましたよ。
A — 先刻も言つたとおり、いくら酔つていても勿論間違はないが職業意識というものはエライものですよ。

E — 私の句に、
——注射してさて庭先の梅をほめ
(端川)

この句には思い出があまりしてね、ちやうどその日、句会へどうしても出られなかったので、無名林さんに持って行ってもらつたら、それが路郎先生の選で天位に抜けた。これが病みつきで、とうとう川柳をやるようになります。今でもこの句は巧いとおもう（笑）。

C — 巧いだろうか（笑）
E — 路郎先生はえらいと思ひましたね、この句自慢じゃないが医者でないと詠めない実感の句です。医者的心境がわからない人ならこの句を天に抜きませんよ（笑）
C — えらい自信だな。
E — 今のお医者さんは、注射をしてから、庭の梅をほめるどころか、用がすめばさつさと帰つてしまふ。
C — また患者のほうでも、以前は茶や菓子を出して、どこかゆつたりしたところがあつて、

患者と医者との間に親密さがあつたものですがね。
E — うるおいというものがなくなったのは事実ですね。今昔の感だね。
A — ではこのあたりで。お忙しいところをいろいろありがとうございます。

(文責・不二田一三夫)
(兼題「誤診」 「医者稼業」の選者は、麻生路郎先生)

9月28日～11月30日

動物切手

と

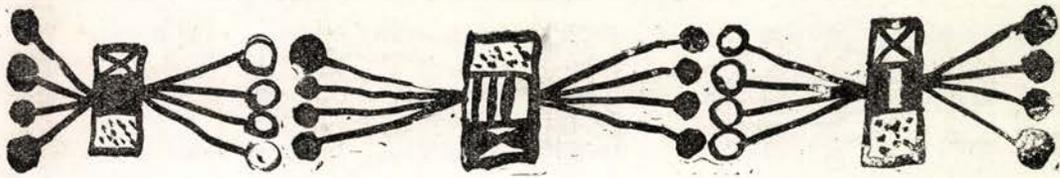
水族館まつり

館園館下村場
習物族ンコ劇
し動水ツス
よ然一外
か然一外
な自スユ野

みさき公園
みさき公園駅下車 特急 急行 増発

南海電車





のぞかれてまたも釣場をかえに立ち

大阪市 丸尾 潮花

身の程を知らぬ理想が嫁きおくれ

妾宅の庭はひとあしはやい秋

兵庫県 小西 無鬼

言論の自由も貧の座にはない

堺市 吉田圭井堂

四年目も豊作笑いが止まらない

お願いと云う恰好で訓示する

ギブアンドテークですよと云うサーピス

大阪市 西い わを

植木屋へ戻れば鉢植立ち直おり

言の端のスリルもあつて左派になり

秋の情事チンチロリンの私語ささやきよ

恋の電話定時通話でかかつて来

ホノルル市 内藤草一郎

電話口返事の嘘を手でかくし

大阪市 太田 良子

処女苑というバーに勤めて面映はゆく

下役の方から暑い話をし

育英資金返さぬままで知事になり

四十五の俺を大きくなりやはった

米子市 三鴨 美笑

何事か俺を自家用車で迎え

まがりなりに隣りのピラを書いてあげ

大阪市 正本 水客

のり茶漬け夫婦ともども利にうとく

秋深み硯の水をかえて病む

踏切はジנגジンガと夕焼ける

豊中市 黒川 紫香

おっさんも巨人びいきかと靴磨

ワイマル 羽佐間柳葉

加減して釣った訳ではない二尾

宇部市 国弘 半休

子も七つあなたあなたとも呼べず

月一べんの稽古に用事の出来るも妻

もう寝たんかいなとすしの折を下げ

子の日記父ちゃんが負けたとは書いてなし

岡山県 直原 七面山

漬けナスの色にも家風がにじみ出て

農繁を踏みつけて立つ若き妻

大阪市 西森 花村

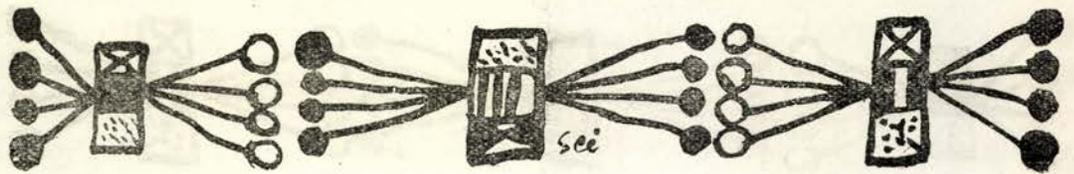
眺望がよすぎ賽銭わすれられ

区切よく禁酒来年からとさめ

重役の小唄に耳は無抵抗

鳥取市 河村 日満

溜めている噂子のない夫婦にて



友だちのようにおんなは子と話し

倉敷市 木村 千容

信頼に応える口は達者なり

自適など思いもよらぬ椅子が待ち

倉敷市 田垣 方大

茶の間では勤評賛成論のババ

枯すすきだけですババのハーモニカ

税込みとはつきり言わぬお仲人

加賀市 野村 味平

女中如きに安客であつかわれ

勤評へ自覚もつともだもつともだ

大阪府 木村 水堂

眺望が絶佳とだけで間借きめ

閑散ひまでよいもの一つに消防署

高槻市 福田 丁路

松茸の値段庶民に縁遠く

虫すだく夜の楽しいへボ将棋

奮励も努力もしない若旦那

一点を見詰め気高き修道尼

くれぐれも無理するなよと借さぬ気の

大阪府 真鍋 一 瓢

拗ねたのが来そなあらしの夜の酒場

大阪府 佐野 白水

ラッシュアワーレディースファーストなど忘れ

大阪府 後藤 梅志

極楽で会えば過労で死にました

スクーター蜻蛉が顔にぶつかり

用水を未だに据える頑固かたくさ

目のふちに隈がでてくるまで婦長

老いて子に従いにくい変りよう

米子市 小西 雄々

上役をおい中村君の意気で呼び

裕ちゃんの声色で娘の人気者

ご婦人に煙草すすめるピラが揺れ

京 都

お色気の消えた祇園の灯をおしめ

百万円の花嫁衣裳が売っていた

呼出して母さんかいと赤電話

山裾に与謝野晶子が詠む茶店

山 川 阿茶

盲点をついたホテルの暗い門

集金のくれる処はあとにする

先生に云うたら先生喧嘩中

赤着てる方がどうやら男らし

しまい風呂都心も夜の虫が鳴き

大阪府 金井 文秋

浅学非才吐とは違う事を云い

子の日記遊んだ事は嘘でなし

父のような人なら嫁くと娘の理想

小松市 伊藤 茶仏

火遊びのスリルに白髪意識せず

おべんちゃら云うのが一人だけ残り

喰い下がるこつを保険屋から習い

お嫌やなら別れる強つい眼に出合い

シリ貧の工場ストにも踏切れず

防府市 長野 井蛙

労基法生活の保証はして呉れず

プレーキになる子があつてよろめけず

ちぎって嗅うケチ金は貯めていず

献立の知恵もうつきて冷奴

傍聴の汗は届かぬ扇風機

嗅ぎに来た猫撫で往診閉す

看護婦の智慧にインタン凹まされ

大阪府 北川 春巢

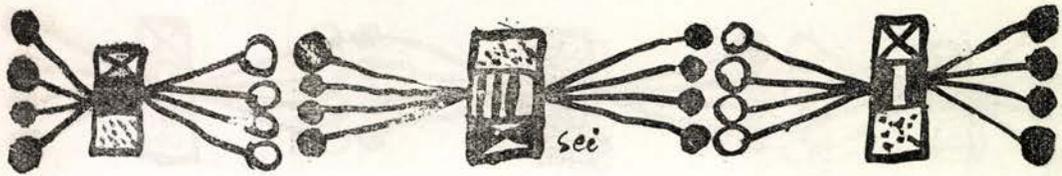
講演会冷房完備書き添えて

勝てば官軍を口癖に言う友なりし

レクレーション行きも帰りも夜行で寝

岡山県 浜田 久米雄

阿波おどりずらりならんだ見る阿呆



阿波おどりピンクのゆれを見ていたり

大阪市 武部 香林

一斉に財布を開ける女連れ

蜻蛉もう飛ばず衛生モデル地区

完全看護恋人さえも近寄せず

五年生そろそろ親のエゴを突き

出雲市 尼緑 之助

ためいきが感染 空があおいのに

お悔みのついでに蔭口も述べて去に

お隣の電化をけなし合ってお茶

尼崎市 小林 文月

葬式をあとで聞いたるあわて様

東京都 山根 白星

二人目も注射の顔になって待ち

吊皮を両手に握り酔いが出る

大阪市 富岡 淡舟

水かけてかけて秋刀魚の売れ残り

夏休み明けの我家は広く見え

友情の金は汽車賃まで添えて

岡山市 服部 十九平

スイッチを主人に頼む電気釜

熊本県 有働 芳仙

始末書を書く父ちゃんの背がまるい

ツンとした妻の背中が岩に見え

親世継婦長さんから先に引き

面会の呼出しへ廊下長過ぎる

事も無き二百十日の入日かな

大阪市 山本 葉光

ピエロになってモーニングが似合い

その他大勢に犬も混って通る夜

倉敷市 水谷 谷水

交際もさせず嫁け嫁け言うのんよ

岡山県 田村 藤波

言うなれば努力の勝利稲の出来

名ばかりの媒介になり実が入らず

仲人の自腹を切った和解酒

岡山県 岡田 夜潮

自信まんまん風呂屋の秤り台へ立ち

いかめしい所長女囚の産見舞

老人を車掌苦もなくつまみ上げ

玉島市 臼井 三林坊

面白い男とだけで引き合せ

大阪市 稲葉 鳩花

愚痴一つ言わぬ貴男がたよりなく

貞操はこんなにもろく散るかいな

茨木市 下山 清潮

台風へ神経へらす幹部の目

我がくらし台風情報聞く如し

岡山県 本田 惠二朗

湯治客へそ見くらべてのどかなり

夢でまた会いましょうねとうぶな恋

不宵ふと父の歎だこ目にしみる

京都市 松川 杜的

教え子に酒量の方も追い越され

松葉杖法座の席を欠かさない

鳥取市 森本法泉子

男手の針にはながいながい糸

まだ五分あると悠々せまらざる

洋服屋年に似合わぬ世辞を言う

別室でかける電話は株のこと

倉敷市 松村 万古

仲裁の無い喧嘩だと今気づき

灰色が嫌か争いまだ続け

尼崎市 藤井 春日

機械が動くから人間様も動き

両親の喜ぶ嘘だついで置き

岡山市 津田 麦太楼

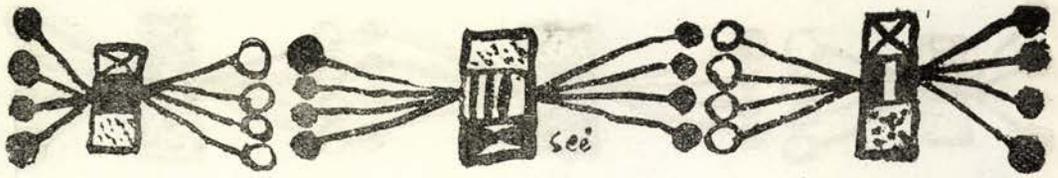
道路工夫ふくれつ面でバスをよけ

駅長の趣味のコスモス真つ盛り

横丁も秋の気配の泥鰌汁

堺市 高崎 雄声

水道の承にも感謝をしたい朝



冷蔵庫の水が惜しい暮しなり

島根県 藤井明郎

乗り越して又終点で高うつき

狼狽一シユン万引の身すほらし

酒が出そうで狸寝は目をさまし

倉敷市 野田素身郎

各駅停車今度は婆さん来て坐り

例年の夏瘦忘れさした恋

拳式近づき話題現実的となり

力づけて欲しいに一緒に心配し

大阪市 木村十悟

ゴルフせにゃ社長でないと小会社の

青春の捨て場に罪が待って居た

大阪市 伊達塚子

打ち水を隣は先に先に撒き

腕白の名残が此処にハゲ一つ

大阪市 不二田一三夫

洗たく機三種の神器のように見え

お隣りのやもめが何かこがして居

兵庫県 酒井ひか平

インキ消して消すように自殺する

豊年の雀何んほもよう食べず

父の留守お医者に見せるのが遅れ

宇部市 津秋六花

鍵しめて今夜は泊ってほしい顔

神戸市 野村初甫

蚊一匹余生を送る秋の窓

掃除器の話しいしい掃いている

明治大帝明治の壁によくうつり

一切は空なり嘘もようつかず

岡山県 戸田喜楽

出戻りの女はたわいなく崩れ

ほろ酔うて戻ればすすきが顔を撫で

唐津市 新岡回天子

寡聞気が女の理性失わせ

共稼ぎした頃を女なつかしみ

岡山県 池田古心

希望した結婚嫁は初夜をさけ

満ち足りて女は籠の鳥になり

東京都 石居高志

恋仇不思議と趣味もうまも合い

風の色見えるよに言うバスガイド

修学旅行水洗便所に皆困り

大阪府 早川清生

食堂に勤め定時に食べられず

メートル法定年覚えようとせず

大阪市 武部若菜

蚊張の裾 波うちぎわに見て愉し

ちがう母に育ちて母を口にせず

堺市 辻圭水

台風を云わず出張命ぜられ

急行のとまらぬここも新市です

加賀市 中松恒雄

欲張りの兄弟だんだん遠ざかり

妻よりも学問大切と割切つて

君君と女社長に使われて

西宮市 小浜牧人

尾行する刑事へ月が明かるすぎ

郊外へ引越してゆく秋が晴れ

三つ四つ買う無花果を撰りに撰り

ガス釜に替えても暇はなかりけり

ハイボール記者は世相の裏話

西宮市 菱田満秋

ぶさいくな方も一緒につつんし

人殺し遊ぶ間もなく逃げ廻り

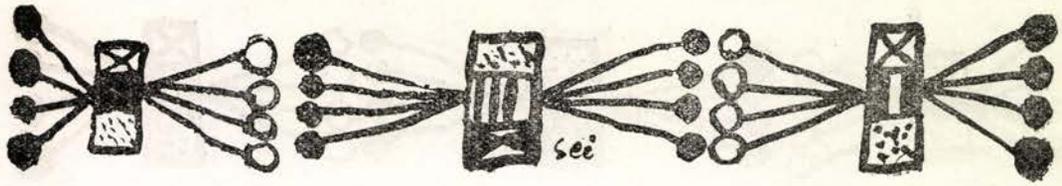
引取った子供を意地で育てあげ

兵庫県 前川左文字

台風へ商魂店を一寸あげ

サックドレスポストのようにひとを待ち





大阪市 橋高薫 風子

妻の癖すぐに値段のことを云う

二枚ずつ二枚ずつ切る熱海駅

女中へはかけがえのない皿と云う

俗中の俗ライターを和尚持ち

下関市 中村九呂平

三本目から門限を気にもせず

大阪市 西川 晃

花も葉もつけぬ古木の厳しい美

安宿で寂しく死んだ老詩人

名古屋市 野田 一念

よろめいた残務を整理頼まれる

コップ酒文部大臣看にし

岡山市 林 葵 丘

恋知ってからの通帳出すばかり

金ためた噂へテレビの荷がとどき

ふと逢うた旧師へあだ名だけ浮び

神戸市 仲 どんたく

これしきの台風に都会の樹はたおれ

竹と紙 日本ブームは安くつき

新内へこおろぎ一役買って鳴き

河鹿荘食用蛙の音もまじり

月給日行って来るぞと勇ましく

なめくじがモダンアートの線をかき

万のつく家賃へ女一人住み

うまいことやりがったと拘られけり

平田市 久家代 仕男

透き通りそうな雑木も山の秋

カリブンを正気の沙汰にせぬ田舎

大阪市 本多 省三

仏壇の電気も消える時は消え

拒否権も予定している決議案

色々の試験パスしたお茶を汲み

大阪市 大谷 月都

夏過ぎて山近寄りが見たい色で澄み

岡山市 江国 幽谷

頁を繰っても繰っても秋の夜

電報で祭に来いと慌てさせ

岡山市 光好 陽子

休暇とは云わず弁当さげて出る

あわて者かと思えばこれがロカビリー

尼崎市 徳永 鬼美

ウイスキー落ちて夜なが楽しんで

西宮市 河相すゝむ

割り切るの外なし矛盾だらけの世

ワンマンの疲れを知らぬ稼ぎよう

煙突を高く残して島が暮れ

西宮市 野呂 鶴汀

橋下に住んでバタ屋も○番地

愛情とは別で賃貸した金は金

西宮市 樋口 舟遊

見習いの逢曳煙突の見える屋

新潟県 高野むじな

広告と知らず赤ん坊写される

意見して若い意見を聞かされる

映倫すれずれを又宣伝し

高槻市 辻白 溪子

義理の父と解ってからの身をくずし

高砂市 吉原 紅月

励ましてくれる男の手が温くし

同情の押しりに来る松葉杖

悴せな窓朝顔の鉢を置き

大阪市 欄 蘭

台風のコースはパンが売り切れる

通天閣の見える二階で将棋さし

サックドレスこけしが歩いてるかと思ひ

大阪市 石倉 旅風

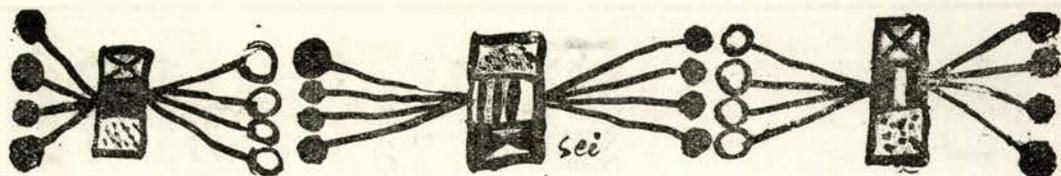
サックドレス他人のセンスを訊いてみる

墓碑に水かける独語へ松の蟬

大阪市 魚住 満潮

眼を閉ずれども瞼に写る人も無し

ラリルレロ医者は真面目な顔で座し



堺市 田中 狂二

末っ子の歯痛我が家の大事件

名月に人影も無い涼み台

頼母子講親が夜逃げをしてもた

大阪府 林 昌男

常連へマダムますます美しい

卓上日記飲む約束の多いこと

飲みに行く相談らしい顔三つ

日曜の出前学生服が来る

愛媛県 村上 旭童

孫用のおしめもあって故郷よし

伯父の死

待ち侘びた秋風だったお燈明

倉吉市 大前 鳴光

貧相な身体で秋の月をほめ

暴力と変らぬ声で叱りつけ

少年のカメラに首をチョン切られ

和服着て出れば女のつつましく

鳥取市 北村 三歩

宮中に梨を送ってどうする気

解決は時にまかすかまた延ばし

高校美術展

機関車の何時でも動く面構へ
神戸市 傍島 静馬

障子の棧みたいな胸で深呼吸

上役の前ではしんせい唄うておき

大津市 杉原 吟女

どうしても一度は嫁く気虫すたく

こおろぎが私のへやにも来て呉れて

パン屋のロボ童謡ばかり聞かされて

笠岡市 木山 遠二

借金を断られたる甲斐性なし

お人好しは損するものと知りながら

懐へ入れると借金でもぬくい

内職で張りきってるか妻達者

日日好日他人の邪魔にならぬよう

あの窓をかくし紫苑の盛りなり

同舟近詠

松山市 前田 伍健

騒音に馴れて立説自若たり

わっしょいわっしょいと先生の株下り

たくましく仕事汚れのよい娘

大阪市 橋本 緑雨

課長の椅子油をさした事はなし

自家用で葬式に来るいとこも居

岐阜市 東野 大八

隻手権記

肩落ちていつかゴッホの貌に似る

腹立てて坐せば影なき掌の痛み

断骨の尖りへ秋がしみとおり

須坂市 高峰 柳児

すぐ捨てる恋あさってるサングラス

朝寝むさぼって失業策もなし

土曜日を役得それぞれ姿消し

新婚の設計月賦に頼って居

和歌山市 秋月 宏方

土砂降りに雷加勢する如し

ストリップ女は生きる道多し

詩情湧くよに雲の峰雲の峰

子のために出来た何本かの白髪

電化してもたわしは首にまだならず

大阪市 石田 沐天

勤め先変るたんびに娘が妊み

校長も宅じゃよれよれ浴衣着て

見送りの帰りそこらで飲む心算

悪知恵も不運不運の果てのこと

御用聞きサックドレスに断わられ

今治市 月原 宵明

酒飲めば湧く斗魂をもてあまし

紅白の帽子台風それた村

失業保険貰う日だけは釣休み



新川柳鑑賞

麻生路郎

〔五八〇〕
勤評をのしる酒を追加する
(後江)

は雲泥の差があるが、何れにしても労働と名が付く以上その楽な仕事でないことは云うまでもなからう。

「要するに勤評なんて怪しからん」と云うことを、酒をのみながら、クドクドと罵しつたが、いくら罵してもものしり足らぬのに酒の方が無くなつた。もっと罵しるために酒の追加をしたと云うのである。作者は先生も感情の動物であることを発見したのである。

〔五八一〕
さびおとす労働もあり造船
(半休)

銀のもらえる労働なのであるうかと疑いたくなると云っているのであるが、その反面には船側に身を挺しての危険な作業であることを思うと決して決して楽な労働でないことが判るといふのである。

所
労働というても一律ではない。ニコソンの労働、ビルのガラス拭きの労働と勤務評定を拒否している教員の労働と

〔五八二〕
定刻に行けば反対派ばかり
(宗太郎)

いろいろな会合に出る人達にとつては斯うした場面にぶつかることは往々にしてあることである。反対派の連中が、呵々大笑したり、ごうぜんと語り合つたりしている隅に、ひとり淋みしく週刊誌などを見ている姿を思わせられる句である。

〔五八三〕
商売のうまいやつちやと見下げられ
(保美)

商売にかけて抜け目のない人間は、ウソも平気でつく、悪事も悪事とは思わない。それがいつのほどにか習性になるので、下劣な人間になってしまう。そんな人間を世間では「商売のうまいやつちや」とは云うが内心では人間の風上にもおけぬやつちやと見下げるのである。面白いネライの句だ。

〔五八四〕
別人のような顔して執務
(美路)

中
一社の事務室と仮定する。昨日の日曜にゆかいにアベックした彼と彼の女とが机を隔

源頼家に 関する川柳

大村沙華

柳多留百六十七篇までには見当らないようですが、川柳評万句合の中に次の一句があります。

○
頼家の轍タハ笹と三ツうろこ
(明二礼3オ)

源氏の笹竜膽と北条の三つ鱗。右の句、「川柳辞彙」は轍と引き、故岡田博士の「日本史伝川柳狂句」第十二冊は轍(のほり)と振仮名をしています。原本には「轍タ」と送り仮名になっているようです(古研復刻本による)。前句は「おしひことかな〜」ですが、あまり惜しくもない駄句で柳多留にも採用されていません。尚、岡田博士は、頼家の母を比企能員の女とし、この句は誤って母を政子とすと記されましたが、之は博士の方が誤りで、御説の如く政子を母とし、能員に関係のあることとは、能員の妻が頼家の乳母であったこと、又は能員の女、

川柳雑誌社特製

投句用 柳箋

一冊(五〇枚綴)三〇円
送料(二冊分)八円

富士野鞍馬さんの詠史古川柳の解説、毎号奥深く拝見しています。古句の解釈常に適確で、「他流試合に切り込まんものをと現代川柳誌主だったもの五十誌に毎月目を通しているが此の仁隙無し」と小生最近「近世庶民文化」誌で感嘆したばかりですが、ようやくのこと、本誌八月号「源頼家、実朝」の御稿で、小さな小さな遺漏を発見しました。即ち、頼家の項で、「頼家に関する古川柳は見当らない」と記されましたが、成程

てて、別人のような顔をして執務しているというのである。彼と彼の女は課長と女事務でもいいし、重役と女事務でもない。とにかく、昨日、ふざけたり、甘えたりしたことは素振りにも出さず、澄まし込んで執務している女をかくも鮮やかに描出して見せた手際を推奨したい。

〔五八五〕

蚤取つてもとの寢息にはや

い妻

(日満)

蚤を取る技術という大変な言葉であるが、女というものは、手探ぐりに蚤を取るワザが先天的に巧みなようである。男よりも女の方が体質的に蚤がたかるようになってい

るのかも知れない。この句も寝ていて、手探ぐりに蚤を取ったのであろうが、蚤を取ったとおもうと、もうスヤスヤともとの寢息になっていると閨中の情景をマザマザと写している。「もとの寢息に」の措字がこの句を生かしていると思う。

〔五八六〕

仲居して育てた母を嫌いぬき (清生)

仲居族とか女給族とかいう人達は特に母性愛の強いものである。別れた男の薄情をなげく前に、すべての愛情が、そのこどもへ集中するのである。石にかじりついててもこどもは立派に育てて見せると云うのが斯うした階級の女の強い愛情でもあり、意地でもあるのだ。

それに反して、そのこどもは、大きくなればなるほど、教育を身につければつけるほど、こうした職業婦人とソリが合わなくなり、その母を嫌うと云う悲しい現実を巧みにつかんでいる。

〔五八七〕

順々に上着をまわし焼香す (草右)

告別式で焼香という悲しくも緊張した場面に、順々に上着をまわして焼香したのである。云うまでもなく、夏のことで、上着なしで出勤していた連中が、告別式に臨み、たまたま上着を着込んでいた人

の上着を順々に借って焼香を済ましたので、誰一人吹き出す人もなかったが、静にその情景に想到するとなかなかユイモラスである。斯うした笑えない滑稽をキャッチしたところにこの句の面白さがある。

〔五八九〕

母なればこそ役得を危なり (万古)

社会に出て問のないうちは一寸した役得もうれいものである。それが歳月が経つにつれて一寸した役得ぐらいでは感激しなくなる。相手方もそれに応えて、少しくどきった贈物をするようになる。しかも、欲しいものをこちから要求するようになる。

それはもう役得の範囲を脱して、誰の目にも収賄としかうけとれぬが、役得にしびれた心には、それと気付かない。「こんなものをいただいていの」と真つ先に危ながるのは母である。

若狭局が頼家に寵あって、子一幡を生んだこと、の何れかと混乱されたものの如くです。

尚岡田博士の前掲書には頼家に関し柳多留以後の雑柳書から更に次の二句も引用されてあります。

角髪て頼家鹿の御得物

(安政四マイ一六〇)

狩場から飛ぶ景高が鹿の使者 (新一八)

蛇足ながら読者の参考のため、大日本史、巻の二百二十四、列伝

第一百五十一から右の句意に当るところを引いて置きます。頼家、幼にして頼朝に従ひ、富

行(非売品)

麻生路郎先生著

川柳とは何か

送 仙 三五〇円 三三〇円

川柳の作り方と味い方

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたもろもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社



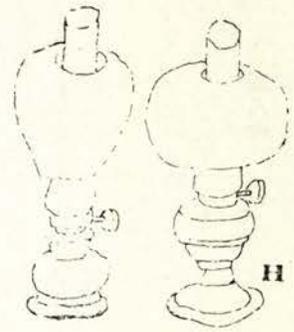
東京都新宿区払方町27 振替東京29507

士野に猟し、射て鹿に中てしを、頼朝大に喜び、梶原景高を遣はして致子に報せしめしに、致子、悦ばずして曰く、兎、幼穉なりと雖も、将家の子たり。而るを、原野に一禽を獲たりとして、何ぞ専使を煩すことを之なさんと。景高、慚ぢて退きぬ。

新刊紹介

地橙孫句抄

佛人兼崎地橙孫の五十年間の収獲の中から喜谷六花氏の選になるもの、下関市の地橙孫句抄刊行会発



須崎豆秋論

(3)

——或は詩川柳に於けるディオニソス——

高鷲亞鈍

狂わざるカメラ

私はさきに「川柳とか散文に孕むもの」の章で自然と人間、富存と貧困、有情と非情・強者と弱者、善と悪を必ず対立せしめて、その二者の衝突による矛盾・相剋・確執が豆秋の作品にあるといった。否豆秋の作品というよりも、それが真の意味に於ける川柳に低流するヒューマニチイでなければならなかった。私は豆秋の作品を一番早く深く印象つけられた句が

秋風の中で乞食に拝まれる

であった。これは季節という自然に乞食という人間を対立せしめ、そしてその乞食に拝まれ物乞いされる作者が、本当は秋風に身に沁むほどふところ淋しい人間で、人から施されても施す術もない人間であるという自省が、この句に表現されている。即ち、自然と人間を、川柳の矛盾で噛みあわした。この句は言外に乞食に対する有情と非情の錯倒した感情を何れとも決定しないところに巧まざるユーモアが下五の拝まれ

るに出ている。何故なら拝まれた作者が、

その時敢えて施しをしたか、しなかったか。拝む乞食は、施しをする通り客とみて、拝んだか、或は習慣的に頭を下げたものか、どうか、乞食は職掌柄、誰れかれなしに頭を下げているまでだ。などと考えるところに川柳に孕むものが胎動して来るのである。

さて豆秋の写実は、自然を活写し、豆秋の人間性(川柳性)を通過した句が少くない。例えば、

A 季節と風景と自然

- 1 タンタンタンタン瀬戸内海は鯛まつり
- 2 名園に小舟が一つ腐りかけ
- 3 秋空のきれいな雲を知らぬ牛
- 4 夕暮れの雲うまそうな色になり
- 5 秋の雲公爵夫人の裾を索き
- 6 春寒き夜店に七味唐がらし
- 7 新緑は木魚の音がするばかり
- 8 春うららはさみほうちようかみそり研ぎ
- 9 看板の裏で茄子の花が咲き

10 雪さらく厨に鱈泣いているよ

11 ようかんをいただいてると地獄かな

12 大毎も止まり豆腐屋もとまり

など新興俳句かと思うほどすっきりしている。殊に瀬戸内海の句は蕪村を思わすような写実である。私は以上挙げた句は自然を対象にした写生句であるが、漸次自然と人間の交流を深め、衝突してゆく有様に順序をつけていった。私はここで、俳句と川柳の相違を述べて、豆秋の作品の川柳性をいっそう際立たねばならないが、本論から外れるので何れ精しくは稿を更めて書く。(註・1)尚、これらの句の11番と12番の句は自然の驚威と偉大さに対する人間生活の営みの如何に心もとなく、頼りなさをそのものズバリで言いあてた句として有名句である。殊に最後の句は些か註釈を必要とするが、関西の風木書で、市内の電柱や街路樹は倒れ、(天王寺の五重の塔がふっ飛んだ)電灯が点かず数日は夜も真の闇であった。従って朝日、毎日の大新聞社では輪転機が廻らず、動力をもつ工場など一切止ったが、朝日は当時万一に備えてジーゼ

ルの用意があったので、新聞の刊行にこと缺かさなかったが、大毎はその用意がなかったたので、町かたの豆腐屋と同列に新聞の機能が止ったのであった。大新聞社と豆腐屋の比較。それは想像でなく虚構でなく、あり得可からざる事実として詠んだ豆秋の川柳性にはまやかしくない。

尚豆秋の写実を挙げたついでに、人間生活をなす庶民性(内在的自然)を描写した句を拾ってみると

B 人物と生活と庶民と

- 1 サイレンの正午があとやさきに鳴り
- 2 晝線の下で水晶の印を刻り
- 3 ビヨイ／＼とうなぎを大中小にわけ
- 4 交番の留守へこんにちは／＼
- 5 降りる客いとんのんと続くなり
- 6 煌々とすしがぎょうさん売れ残り
- 7 チョン／＼と左ぎつちよで鮓を切り
- 8 お祈りの声がだん／＼ヒスになり
- 9 啞の子の話術ペロリと舌を出し
- 10 写真班もめてくるのを待っている
- 11 薄情を聖天さまへ告げにゆく
- 12 病人のみんなたかって嘘を言い

右のうち2の晝線の句は、晝線と水晶という概念の構成、だけで詩的なイメージを覚えるが、それが、小さな何処にもある薄暗い軒先で刻んでいる判屋の風景として絶対に動かない句にしている作者が心憎い。尚ほかに説明すればキリがないので省略するが、大体、人物、社会、庶民の生活描写をスケッチ風から漸次物語り風に、例えば映画的な実写手法で順序づけてみた。この場合私は豆秋という監督に手渡したシ

ナリオ・ライターでしかなく、読者はその一コマ一コマを自由に観賞すればそれでよい。

(註・1) 前田雀郎氏は自然の向側にあるのが俳句で、こちら側にあるのが川柳である。と云っているが、これは可笑しい。何故可笑しいかというと、人間が自然という鏡の中にあるのが俳句、鏡の外にあるのが川柳という風にとれるからだ。自然は鏡のように人間の外側にも内側にもないからである。私はここで端的にいうが、自然と人間は本来は区別されない。人間も亦自然の中にある存在であるからだ。自然が超越的人間としての神々の存在も可能であるなら、俳人も川柳家も自然の人間である。但しここで俳句は自然の人間に人間性を解消してしまふ否定の立場が俳句の世界観であり、自然の人間に人間性を肯定し挑んでゆく現実が川柳の世界である。(世界観ではない。) 私はそれ故に俳句は自然(人間を含めて)を参照する立場。川柳は自然(人間を含めて)に行動する立場。前者は人間性の否定。後者は人間性の肯定。と結論する。詳しくは別の機会に柳・俳論を陳べる。

豆秋の貧乏感と悪

色あせた茶色のソフートをチョンと頭にのせ、型のくずれた背広を着ている豆秋は、町工場ではあるが、工員数十名を持つ工場の事務をとる総務部長であり、専務である。彼は彼の社長につく重役であれば、相

当の高給者に相違ない。家庭には子供がなくお金はのこっていくばかりであろう。しかし彼は時に職工帽を冠り、工員服も被て平気で句会に出てくる。酒をたしなむけれど、オデンやの安酒ばかりをおほり何か吝くなく、貧乏くさい。

逆さまに定期を見せて走るなり

の慌てた毎日の通勤で、その会社の重職にありながら、余りにも安サラリーマンの根生丸出して、

えらい人の朝日一本だけもらい

と社長の抛り出した朝日を断つて畏る畏る一本抜いてみたり、銀行に使をして、銀行の窓へ大きなお辞儀をしその上

腹工合わるし大金持たされて

小心翼翼しているかと思うと、官費の宴会のはて

骨立てたまま二次会へついで行き

折詰まあんじょ女給にいかれたりするさまは、人の善し悪しを通りこして、いぢ穢いことありやしない。兎も角、金が無い貧乏だと言っているも、宝くじを買うだけの不要な小金をもち、パチンコもやれば酒も一人で飲んでいる。

金が無いからよ三角くじまひく
パチンコの玉さへままにならぬ世ぞ
佳い年をとれよとパチンコ屋で袂れ
臥ていても卵酒ならとんで起き
らりるれるはつきりしない程に酔い
はしご酒大阪中が寝しずまり
ということは吝くなく貧乏くくくしているのは見せかけて、自分一人でやることな

ら、好きな酒は臥せていても飛び起き、大阪中が寝しずまるまで飲み歩くに事缺かさなければ、家に老妻一人の気安さから、年の暮でもパチンコの玉に勝負を賭ける豆秋ではある。これは反面豆秋の人間としての利己的なズルさである。だが私は豆秋のその狡さこそが一般人の持つ、裏腹な腹黒さを指摘したいのだ。それが庶民の声であり、いみじくも川柳の現実をそこに見るのだった。そうした豆秋が庶民の一員としての体験を語ることによって、句は客観性を

つくと
間違うて拘りなや金のない財布
は秋風の句にある乞食に拝まれるアイロ
ニーと同じ有情と非情の対立を出し、やが
て
どろぼうと思つて汽車の連れになり
はしたが、結局
守り札もろともチポにとられたり
そして
くくられて刑事と話しながらく
囚人になつてむくく肥り出し
寝るとこが無いぞ恩赦で出は出たが
とスリや盗人の罪悪行為よりも、その前
科者になる人間を解放する豆秋のヒューマ
ンな、対象的な刑事に話しかけさし、囚人
になつて「肥り出す」という表現で贖罪感
を見つけ、牢獄よりも、娑婆の現実生活の
方が苦しく暮し難さを憂慮する豆秋であつた。

のようであつた。例えば
ルンペンの箱に鍵がかかるとる
これは皮肉でなく、ルンペン
はルンペンだけの秘密の鍵があり、「上海だより」の鼻唄も出る朗景を詠むかと思うと、盗られることが判つていても
やがてこの自轉車も盗られ
るならん
と銀の食台を盗つたジャンパ
ルジャンを許した牧師のよう
に――。
うしろにも前にもスリがい
そうなり
と周囲に秘むスリの気配に感

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ大動脈
近鉄特急ダイヤ

大阪上本町発	近鉄名古屋発	宇治山田発
7.40	8.00	8.40
8.40	9.00	9.40
9.40	10.00	
11.40	12.00	12.40
13.40	14.00	14.40
15.40	16.00	16.40
17.40	18.00	18.40
18.40	19.00	
19.40	20.00	20.40

上本町 9.40 18.40 名古屋 10.00 19.00 発
は お楽で便利な新設特急ご乗車下さい
・印は 二階展望室つき

座席指定特急券 5日前から発売
近畿日本ツーリスト 交通公社 特急始発駅

近畿日本鉄道

う考えると彼の貧乏観は、啄木が個人的な貧困や悪を漸次社会的な悪や貧困に視野を拡げて、遂に社会主義者になったのに反し、豆秋の場合は、いつまでも何処までも個人的な貧困や悪から一步も脱していないのは何故か。

無一文というスリルを君知るや

手を振って見ても手ブラは淋しすぎ

は完全に啄木の感傷そのもので

啄木の真似してカニにはさまれた(註・1) 啄木でなければジット手を見るよ(註・2)

のや、個人的な貧乏感から社会的政治的貧困に目を向けようとした

むかしむかし稼げば楽になりしとか

金儲け見戯に似てると思へども

にやっときているが、しかし彼はコムニ

ストでもソシヤリストでもなく、庶民としての人間の座にどっかと居据っている限りは、それは川柳人としての面目であったかも知れない。そして個人的な不遇、貧困、悪を漁り歩く豆秋の自虐はなお続いてゆくことであろう。

(註・1) 東海の小島の磯の白砂にわれ

泣きぬれて蟹とたはむる。(石川啄木)

(註・2) 働けど働けどわが暮し楽になら

ざり吾が手をじっとみる。(石川啄木)

一 茶 昇 天

一茶は道端の子供と共に遊び、藪と角力をとった。柳界の一茶・豆秋も亦一茶のように子供や虫、動物を川柳しているが、それは一茶のように遊んでいない。——俳人

と川柳人の相違でもある。(狂わざるカメラ)註・1参照)——豆秋は子供でも虫でも自然的存在として一茶の如く無我で遊ぶのでなく寧ろ自我を主張し、現実を冷酷に突っ放して、遊ぶどころか、子供たりとも容赦せず、鋭いキバのような批評精神(川柳精神)で挑みかかってゆくのである。

街の子よ気がつくまいが晝の月

と一旦は子供のいない豆秋でもあれば、晝の月のような淡い愛情(本能)を街の子に寄せるが、直に現実の子の反逆性を捉えて、

親に向ってホッチチカモテナヤ

の可憐なりし、言葉を覚えればかりの

口応えを指摘し、

寒いとこよって乞食の子は坐り

ちちははにめぐりあいたや靴みがく

と不幸な貧しい子供まで取上げている

が、だから可哀そうに、とこの句意から読

者は涙がしほれるだろうか。乞食の子はや

はり乞食の職業意識(ことさら同情を寄せ

るような哀れな声・態度)から寒い日は、

なお寒そうな場所を選んで坐る巧妙さを筆

者はみるし、靴磨きをことさら孤児にした

てて「阿波の鳴戸」式の人形淨瑠璃の哀れ

っぱさを誇張せしめた巧みな表現の裏を返

すと、却って豆秋の冷酷な非情に慄然とす

る。

チンピラは仕立家銀次になるつもり

とはつきり、悪の方向を指し示す豆秋は

素材(ナイーブ)である可き、あどけない

子供(註・1)にも背なをむけ、そうした人

間憎悪は、物言わぬ、動物に、虫ケラに到る

生物にまで彼の川柳行脚がつづけられる。

今晚は台風だとよコスモス

よ

長靴の中で一びき蚊が暮し

てぼちゃんへ蠅はわざく来

てとまり

こほろぎは足を落したのも

知らず

流されて蛙道頓堀だった

たとえ、コスモスのような草

花でも、蚊・蠅・こほろぎ・蛙

の句にしても、凡て自然と人

間、人間と生物の関係による

衝突と交叉がなされ、そこに川柳的現実

を把握しているのが豆秋の身上である。

(註・2) コスモスが地上の星のように咲

いたとか、蚊がブンと飛ぶとか、こほろぎ

が秋の夜をなくとか、蛙がガアガア鳴いた

とか、コスモスそのもの、蚊・蠅・こほろ

ぎ、蛙そのもの、或はそれ自体を詠む自

然的存在(俳句的世界観)でなく、それら

は庶民生活する人間豆秋と共存する生態と

なって現実存在するのである。豆秋のリア

ルにはコスモスは最早コスモスでなくて台

風におびえる人間であり、蚊や蠅も庶民と

生存を競う小さいながらも一つの生命であ

り、片脚を落したこほろぎに驚けば、蛙や

古池に住むべき田舎者にも物の弾みで賑や

かな都会の青い灯、赤い灯のうつる道頓堀

川の水を吸わぬとは限らない。

あびじゃこのいのちは柵ではかられて

寒鮒は身もちのままで煮つめられ

みの虫のなんぼ飼うても壁だった

スタートで 着心地のよい

O.S.K.

レディース

株式会社 大坂商店

大阪府東区東船場一丁目二番地

電話 (94) 1745-5563

りかえようと意識して作句したのではな

い。事実、乾えびやじゃこなどのダシは乾

物屋の柵に入れられ、子を沢山もった寒鮒

はうまい。又きよう屈いた「川・雑七月号

の「窓口談義」で路郎師が、はからずも、

豆秋の「みの虫」の句を引いて、川柳の壁

を説かれていたように、えび、じゃこや寒

鮒やみの虫を人間に比喩し、響え、象徴す

る読者の側は自由である。しかし豆秋は、

徳川家康の垂れた家訓や、諺や格言を詠ん

でいるのではない。それは事実としてえび

じゃこの命と柵があり、身持の寒鮒は人

間世界では嗜好物である。みの虫と壁はや

り得る事実である。その事実は余りに厳し

く動かすことの出来ない現象として生存す

る虫ケラ類を拉し来る故に、事実よりも真

実を、現象よりも抽象に、豆秋のデイオニ

ソスの理念に、人々は共感するのである。

然し——

A こほろぎの哀れは猫に食べられて

- B 家鴨の子泥鰌の太いのにあわて
- C 出勤へヒヨコがすこしついて来る
- D 恐ろしい風だったと雀しやべり合い
- E 児が追へば鳩は歩いて逃げるなり
- F 手ぶらでは鹿も相手にしてくれず
- G 口髭を生やして猫の子が生れ

などは、事実の動物は動物としての家鴨・ヒヨコ・雀・鳩・鹿・猫の生態をそのまま写し出して、目にぼやぶやうだ。がここでも豆秋は人間(出勤、兎、手ぶら)と衝突せしめ、相剋、確執せしめることによつて、彼らは彼らの弱肉強食の生存競争の摩擦(A・Bの句)を二重にダブルして、「白い山脈」のような記録映画の効果をあげつ、読者をして知らず知らず豆秋の白い山脈——散文芸術(詩川柳)に引きずられてゆくのだ。別に擬人法を使った、雀(D)と猫(G)の句は、何れも、その生態をズバリと言ひ現して妙である。

(註・1)愛情をもつた子供の句は路郎師の「子沢山ほくの枕はどこえいた」の代表句の他たくさんあるが、豆秋と対象的な丹路の句から一、二拾って例とする。

美しきに如かず子の鼻つまんどき
 ひしと抱き寄せるもの子の他になし
 (註・2)「川柳とか散文に採むもの」の章参照。

不審と危機

豆秋に父と呼ぶ子供が無い。本来なら孫やひい孫まであつてもよい年輩の彼ではあるが、そういう話は、本人は勿論、他から

も私は聴かされていない。不審に思われるのは奥さんがあるのかとさえ疑いたくなるほど、妻や子供の句になると非常に妙く、はつきり自分の妻子と断定し得る句は皆無といつてよい。これは後世になって、大久保彦左エ門の妻子のように、講談や映画にも出せない謎の語り草になりはしないか。

**老夫婦お経の文句行きつづまり
 神様へ腰の痛いのもたのみ**

が辛うじて夫婦生活からくる年寄りの神仏詣と覚えるが、句意は兎も角、これが、自分達夫婦の日常を詠んだか、と想像すると、私は老青年豆秋の家庭らしく感じられないのみならず、豆秋の句とも思えないのである。彼がしかし老妻のいるなしに拘らず、犬猫の家畜に全幅的な愛情を人間の子供以上に寄せて――

- A 貧しさま猫の顔して笑うて見た
- B 暑いから猫が泣いても腹が立ち
- C 地藏尊犬殺されるのを見ておわし
- D お彼岸を乞食の犬も坐らされ
- E うちの犬だけが鳴かない夜となり
- F 天国へトボく行くか尾を垂れて

と詠んでいるが、どちらかと言うと猫よりも犬への愛情がきつい。しかし前章の例句に述べたように、相変わらずそれぞれの生態を的確な客観で捉え、豆秋の個性(主観)は、川柳のリアルを設定する。有情も非情もここでは錯倒しないで、そのまま投げ出してしまふのだ。彼は乞食や乞食の子に非情の白い眼をむけるが、乞食の親分をそばで坐らされている無心の犬には愛情を注ぐ(D)。惨忍な犬殺しより、本来が優

しかる可き石の地藏が救いの手を述べないのを悲しむ(C)

彼はこれという宗教を信じているようには見受けられない。強いて作品から想像すると家に先祖の仏壇でも祭つてある程度でほとけさんこれ十円のまんじゅです丸停のお布施なりけりなむあみだかけまくもかしこしお神酒水臭い

とかけまくの句は神さんではあるが、何れもお供や、お布施の品定めをしたり、神仏の功德を本気に信じていない。これは豆秋がうわべは腰が低く、謙譲らしくみえて、それは外柔内剛型で、案外自我の強い意地っばりのお人かと想像されて、そういう人達に多い無神論者なのである。そう判断することによつて、ここにも豆秋の思想がディオニソスであるという証明にもなってくる。

- A 洋館へ先祖の槍の置きどころ
- B 借金の嵩も流石は名士なり
- C アーン痛い／＼紳士齒を抜かれ
- D 面憎いほど妾宅がならんでる
- E ふところにお金があつてよくしゃべり
- F エスカレーター旦那のあとをおっかける
- G カナリヤに留守番さしてどこへいた
- H けなげにも家主の犬を噛んで来た

以上は豆秋が取材した富有階級の句である。

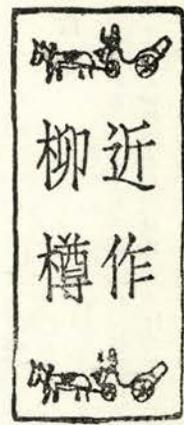
大体豆秋自身の貧困は先の「豆秋の貧乏感と悪について」章に於て述べたが庶民の一員としての貧困。即ち個人主義的なもので、そこに社会性がない。と同様に富有を対象にしても個人的富有者を取材する。従つてこのような富有とか権力に対する抵抗が非常に弱く、押し出す強い思想がない為に、非常に感情的な反抗が、Hの句に見られるのだ。元士族の子爵邸の斜陽階級(A)。

そのままして外出する有閑マダム(G)は、それはそのままの観察にとどまり、借金する名士(B)。歯医者で気儘な紳士(C)。妾宅(D)。旦那と二号のデパート風景(F)。など、自分の立つ貧民階級に対する痛烈なる諷刺に比較して、寧ろ長いものには巻かれよ式の、あこがれに近い感情がのぞいているのは何故だろうか。私は万一度秋に、こういった微温的な態度を改変しなければ、やがてはディオニソスは豆秋のものでなくなるだろうことを恐れる。(未完)

**安産のために
 ビタミンB1とビタミンB2**



姉妹品
 ビタミンB1入小粒 五〇〇錠 二〇〇円
 ワタカル・ピタム 二〇〇錠 二〇〇円
 ビタミンB1・B2・AM・D・鎗・鉄 配合



麻生路郎選
北川春巢選

タバコ代催促をして出勤し阿山市 宗高矢寸志
 二号置く気持不幸にして解り
 恐かった借金何時か倍に増え
 叱られているのに人が突当り
 測量はあれでやっぱり仕事
 中年が近く晩酌にも酔えず
 銀行を出て重役の顔になり若松市 三上 春雄
 別れてもいいが手強い手切金
 失礼な方ねが今のハズバンド
 焼酎でよし旧交の温かみ
 御希望の品は財布がいやと言
 善後策話のわかる父を知り
 大臣の土を踏まないお国入り玉野市 伊原 明林
 女 事務月給順と違う服
 ちくはぐのコップで夏も終りかけ
 窓口は標語と違う男事務
 今日からは夫の姓で電話かけ
 田舎者と見られたくない交又点
 罪のない嘘だが顔へ血がのほり赤見市 関 す頭女
 イヤリング男むっつり選っている
 くつ音へ毛糸二尺がとこころげ

一姫二姫三姫四姫恩給みな着られ
 クダまかれるより詩吟きいてや
 物騒な文字を並べて平和祭大阪市 平沢 保美
 テレビまで備え火の車を廻し
 淋しさに宿を立ち出てパチンコ屋
 避暑の子へ鶏卵産んで見せ
 退院
 修理した肺へ曇の香を滲ませ
 新しいママと慕参のバスに乗り石川縣 同村 虹要
 日曜大工女房に外科へ付添われ
 妻の声電話で聞けば艶っほし
 くだをまく紅一点を持てあまし
 小遣を親爺の二一号から貰い
 人間を廃業したい秋の空岸和田市 内藤ささ子
 金持のベビーあやして気が疲れ
 文学に秀で色気のない女
 岸和田地車祭 二句
 だんじりの横で無沙汰をわび合ま
 お囃子へ踊り出したい城の松
 みつ豆でびひの入った恋と逢い大阪市 同 板東千代美
 もう来ないひとの扇を抱いて恋
 鏡台へ恋を取られた顔の艶
 台風が来たら唄うて死ねそうな
 音をほめた風鈴さえも腹が立ち
 お稲荷へ母だけ拜む親娘連れ出雲市 同 山本 朱紅
 お互にがん張りましようとのここ
 正面に日の丸がある佳い訓示
 電化とは遠くうちわの手内職
 禅寺に悟り切れない金を貯め



柳眼曆

直原七面山

女は、顔が美しくなるために
 は、命をかけても悔いらないと言
 ことですが、心を、知性を磨くこ
 とに、なぜ命をかけようとはしな
 いのでしょうか。
 男性の理解に苦しむものの一
 つ。

酒を飲むと愉快になるのではな
 くて、だんだん憂うつになり、は
 ては涙をハラハラ流してぐちりぬ
 く柳友が一人おるのですが、こん
 な男に良く効く薬をご存じでした
 らお教え下さい。

自称つりの名人が、つりのこと
 ならほくになんでも聞いてくれと
 言うので、カラスのつりかたにつ
 いて尋ねてみたら、ほくのつりは
 水陸両用じゃあないんだよ、トン
 ボつりや女つりはほくの権限外だ
 から、だれかほかの人に聞いてく
 れよと軽く逃げられてしまった。
 ×
 メートル法の実施で、ある



出不精を詫る母から彼岸花宇都市 上林 粗影
 ぐれた子よ戻って欲しい盆の月 同
 感化院汗の南瓜の数を読み 同
 うれしきの赤い帯からこぼれ出し 同
 成功の蔭に小さい仏壇おわします 同
 安全旗に風あり下の鉄兜奈良県 吉田 凡茶
 集金の寄らないうさの生ビール 同
 売るものは安い農家の台所 同
 銀行も氏神様のある休み 同
 無口だと知って女中もすぐ退がり京都府 都倉 求女
 石の出る駅人夫もしんどかろ 同
 悪事さす頭のよさが不仕合せ 同
 どこへ行くにも縁談かときかれ 同
 芳名簿我が名改名したくなり小松市 万仲 一進
 二階借へこおろぎの声よくとおり 同
 ざるそばへ音する銭で女学生 同
 風邪気味も祭りへ叱りながら出し 同
 盛り場の味甘栗を買うて来る堺市 沢田 美喜
 決心をして買いました月賦です 同
 原色は好きませんのとクリスチン 同
 母ひり子ひとり怪気おとろえず 同
 嫁が来てからは忙しいフライパン高知市 須藤 俊江
 法師蟬背などで聞いている嫁き遅れ 同
 学歴もあってパーテン静かなり 同
 トコロテン式に学校出て無職 同
 月賦とも知らず首振る扇風機枚方市 草深 酔舛
 お百度へサツドレスも汗をかき 同
 アンテナも飛び立ちそうな秋日和 同
 買ったてのテレビへ目葉まで使い 同

アルサロの電話愛情売ることし大阪市 小島さぎす
 昼休みニコヨン重役ほどにとり 同
 道に寝る人に都会はふりむかず 同
 酒をのむ大人が祭る地藏盆 同
 憂うつが手形のように襲って来東京都 菊地 紀久
 首切らぬ温情給料据置かれ 同
 見舞客飲めぬ飲めぬと坐りかえ 同
 里へ来て遠慮なく食う共稼ぎ 同
 年寄りの日祝ってどつと寝こま平田市 石橋方古人
 お役所に能率増進という休暇 同
 障子張れとの秋祭近づいて 同
 金詰り狙ったように雨が洩り 同
 楽観は許さじ金はばらまかれ鳥取県 谷 無閑
 賛成の拍手飲みさえすればよし 同
 代診の方を病人信頼し 同
 白髪抜く顔は無念無想なり岡山県 杉田 明美
 話す人あれば涙の堰も切れ 同
 設計図盛り込む夢の多すぎで 同
 パトロンと別れ恋人寄りつかず小松市 関戸宗太郎
 寝転んでひきだしあれもこも云い 同
 教会で見染め神社で式をあげ 同
 つかいものしいしい活きるた鳥取県 鈴木村諷子
 新聞を配る子美談ありそいな 同
 卵売るだけに産経取っている 同
 身替りになり度い生命が隠居をし西宮市 樋口 寿栄
 算数がとけず夜食が気にかかり 同
 鍋の底磨く自活がまだ出来ず 同
 口笛を吹く嫁が来て明るなり和歌山県 木下 一休
 三合で酔えず二合の酎にする 同

ヒゲソリ後に
アストリンゼンは世界的常識!
 1 生々した男性美をつくる
 2 爽快でヒゲソリがたのしい
 3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力!

明色アストリンゼン
 桃谷順天館

変人が、「五尺の体をもてあま
 して言葉があるが、あれやあ君百
 五十種余の体をもてあまして言
 うのかい。」とからんで来るので、
 「そうだよ君、胸三寸におさめて
 と言うのは、胸十種におさめてと
 云うんだよ。」と言ったのけたも
 のの、白髪三千丈と言うのは、白
 髪九〇九米って言うのでしようか
 ね。」
 ×
 世の中であなただけは信じます
 と言っていた娘が、男に子を孕ま
 されて捨てられたと言う話があり
 ます。
 かと思えば、「おれの顔を見て
 笑ったからよう、シャクにさわか
 ってバラしてやったよ。」なんて、
 真実四十男のサラリーマンを刺殺
 しているんですからぶっそうなも



豊作へ担ぐ神輿はゆれにゆれ
 金ためてからの主張は良く通り 七尾市
 雑巾の待つ出勤ヘイヤリング
 肩揉んでくれる孫あり老いの日に
 身に余る言葉をうけて左遷され 大塚市
 チャンネルが増える たんに金がいり
 エブロンで来いとP T Aの会
 母さんの恋人だった人に会い 貝塚市
 重症になって 患者の恋終り
 死んだろかと思うまでに見舞来ず
 彌次馬を邪険に払う事故現場 玉野市
 観光地ガイドに名残り惜しまれる
 洗濯物濡らしただけの俄雨
 秋の灯の二階へとどく虫の声 布巻市
 店先でセンスの程を値がみされ
 メートルをあげてB型ふり廻し
 ほんとうの愛情キッスは可笑し 伊丹市
 お見舞は敷布の皺をのして去に
 まあお手酌でと注いで呉れただけ
 だんだんに崩れる扉は気にならず 岡山県
 グランブリ抱いて荊の道想う
 ああまでも人が変った金が出来
 台風一過倦怠期まで持つて行き 貝塚市
 お遍路のあとを追うよに赤トンボ
 不景気の余波はベッドに まきひびき
 スーパーマンが四五人 はしい社のピンチ 熊本市
 デパートで玩具の進歩見て帰り
 教科書はきれいなままの次男坊
 父親が育てるほうはうすよ 広島県これ
 草の実の運命硯の中に飛び

同 松高 秀三
 同 河井 庸佑
 同 護川 梢月
 同 小谷 仙山
 同 久米奈良子
 同 小川静観堂
 同 太田 蓑流
 同 杉本 一鶴
 同 田口 麦彦
 同 杉原 愛鳩

他人の口かげではまま子の肩をも
 メートルの換算表を壁に貼り 岡山県
 街に豪華車一家心中の記事続き
 年賀状暑中見舞で返事来る
 夕焼にテレビアンテナ見栄を張り 鳥取県
 値切られて店主ソロバンも 出て出る
 焼酎の酔は不景気忘れさせ
 家計簿もあえぐ子供の食べ盛り 広島県
 一しづくほどのおしっこ慌てさせ
 共稼ぎ夢一つずつ実つて来
 大吉を枝に結んだまま別れ 厚和田町
 結納の荷物に席をあげてくれ
 雑巾を縫う宿題が男の子
 三部経神経痛によくこたえ 大阪府
 叱られに行くのに土産持つてゆき
 商魂は会得していて低姿勢
 会長のうぬぼれ忠告寄せつけず 金敷市
 送られて行く駅までが短か過ぎ
 メートル法姑の位置ゆらぎかけ
 プラトニッククラブ どと来て迷い 鳥取県
 社の景気いいのか見舞派手に来る
 計画をほめて融資はしてくれず
 家内みな集め姉さん来る話 西宮市
 制服のサイズへ乳房反抗し
 おかわりをして付添をほつとさせ
 のぞいたら漬物だけが冷蔵庫 大阪府
 阿波踊り見に行く阿呆で船に酔い
 飲む事に定めたら洒落もと 出て出る
 忠告の通りなんだが腹が立ち 美祿市
 隣より早いのは胡瓜をきざむ音

同 榎原 万女
 同 土江 洋々
 同 山内 俊見
 同 真崎浪速子
 同 石井 伸生
 同 小倉美音子
 同 矢野 鳴界
 同 富永 夢路
 同 島田 雄峯
 同 安平次弘道

お知らせ
 バックナンバー御入用の方は、
 往復ハガキでお問合せ下さい。
 川柳雑誌社

のです。
 うかうか人の方を向いて笑えも
 しませんよ。

驚くじやありませんか。
 ロカビリーなんて、ギヤアギヤ
 ア蛙をふみつぶしたような声を出して、床をなめなめうたう唄がはやるなんて、若い娘さん達にとってももてるんですってね。

なんでも娘さんが熱狂のあげく、はいてるパンティをその場で脱いで、舞台の上にはうり投げる
 と聞いている、これはもう、明治生れの人間が出る幕じやありませんよ。まったく。

我等の支部長
 小西無鬼氏

酒井ひか平

氏は町会長としての世話役も兼ねられているのだから公私多忙と云う外はないのだが、句会ともなると定刻にはちゃんと出席されて、布団の世話から、お茶の用



秋風は寂し君住む町へ吹き 大阪市
 コスモスは儂ない恋のように咲き 豊中市
 ビルの窓明けて色気のない話 豊中市
 金で張る恋と知ってて手をひかず 西宮市
 秋海棠好く人になり面やつれ 西宮市
 太るのを苦にして秋に抵抗し 大阪府
 習うのはいずれよるゝ気のダンス 大阪府
 平凡に生きる気にする子が生れ 近江八幡市
 飲めないと言いつつ最後まで坐り 近江八幡市
 勤評の闘士も家じゃパパとママ 西宮市
 海草も打ち上げられて浜は秋 西宮市
 ひっそりと手のかからず子を案じ 岸和田市
 ラケットの腕に若さの皇太子 岸和田市
 サンマサンマ今日も戸障子開け放し 豊中市
 流行を着てマネキン無表情 豊中市
 合理化をはかり現職から追われ 大阪市
 世論とは時の政府に味方せず 大阪市
 貸す方の鋸も用意のある大工 西宮市
 ちゃっかり屋誘うた酒まで払気 西宮市
 甲斐性もないのに養子ことわる気 兵庫県
 生前のわる口言うて土を掛け 兵庫県
 八十の親送るまで死ぬん気の 同
 テレビ寝て見ると疲れるとは課長 大阪市
 頭かず揃え町内陳情団 同
 五六枚使うて名刺も左遷され 兵庫県
 ケガ人がないでやじ馬散って行き 同
 息子にはさせまい職にしがみつ 同
 鉢巻はストではないぞ稲を刈る 同
 敬老会の余興に婦人会踊り 同
 宿題の間テレビを消してやり 同

国府 玉枝
 石川ひさみ
 末沢 友子
 同
 谷沢 好祐
 同
 奥野 正一
 同
 御園生 江
 同
 中野三四郎
 同
 林 冨男
 同
 松谷 政俊
 同
 中橋川太郎
 同
 河原みのる
 同
 西本 保夫
 同
 遠山 一雨
 同
 出原 真奇
 同
 土守 蜻蛉
 同

いれずみがしほみ珠数持つ齡に 大阪市
 週休へ婦長マダムに似た和服 同
 送別の宴で只酒とも別れ 同
 釘の折れ書くとは見えぬ爪を染め 同
 酔心地満点と言う酒を吐き 同
 総入歯喰い気まますます盛んなり 同
 欠伸して見上げた空の真青な 同
 ぶあいそに男老婆へ席ゆずり 同
 妻病んでから洗濯機買うときめ 同
 恋捨てて都をすてて去ぬ荷物 同
 百姓の煙草のうまい稲の出来 同
 泥酔にさせて心で軽蔑し 同
 縁故だけ頼りきれない金を蒔き 同
 大安が一目でわかる特二着く 同
 弁当の重さに勤労意欲湧く 同
 酔どめを忘れずのんでバスの旅 同
 金というもののどれいになつて 同
 フォークダンスPTAのお母さん 同
 倦怠期バーのマッチをやけにすり 同
 旅の恥立って飲むのも板につき 同
 職場では旧姓のまま共稼ぎ 同
 冷蔵庫なくとも古里井戸でよし 同
 ビーマンが好きでお里を疑われ 同

復 戦

藤富 淀月
 同
 木山 二路
 同
 平田 実男
 同
 山本 一傘
 同
 竹内花代子
 同
 佐内 隆文
 同
 塚脇 笑太
 同
 波多野 美由起
 同
 岡崎 祥月
 同
 細川 千草
 同
 越智 一水
 同
 吉本 善風
 同
 横山 一声
 同
 岩田八文銭
 同
 工藤 甲吉

意、句せん裁断迄も黙々とやって居られるのはただ頭が下がるのほかはない。

氏の右腕を務めなければならぬい筈の私がよろめき型であるだけに、氏の苦勞が思いやられる。

どんな雪の日でも雨の日でも、句会場の丁ちんを自分で吊り、帰りにには自分で外され、一と言のぐちを云われた事が無い、十年一日の如く路郎師を尊敬され、人間陶冶の詩川柳を自体で実せんして行かれる姿は、時として、涙ぐましくもある。

こないいい支部長、無鬼氏を持ち乍ら、此処と云う処で伸び悩んで居る篠山支部の大半の責任は私にあると思うのである。今後何とか一度でいいから、氏に「ひか平がやって呉れるから」と喜んで頂ける日が来る様にと心掛け、自分

本

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話③三三四番



雑草は伸びる地主の夢の跡
スランプだなどモデル氣を使い宇部市
村八分されて頑固がまだ折れず
夕焼の色が夫を若くする岡山県
鯛一匹買うに血迷う魚市場
茶のみ友という名目の嫁をとり大阪市
人生の五十ぜんまいとけかかり
投資案内家間違えたように来る枚方市
とうふ屋の上むぎ行くアパート街
軍備反対してたに自衛隊へ行き大洲市
誕生を一度に祝う子沢山
上の孫ソロソロ来てる反抗期広島県
エアガール恋のアンサー早く知れハワイ
水くさいなと言つて呉れる友を持ち松江市
渋いど待つてましたとおだてられ河内長野市
十代の無軌道羨ましく思い天理市
年寄りの日にも赤旗ふりまわし兵庫県
銀行で呉れた日曆派手に掛け鳥取市
落つきをみせて嘘つく長煙管田辺市
行倒れ葬式金を腹に巻き大阪市
この恋は育つと易者真顔なり須崎市
丸出しのなまりで女将如才なし西脇市
蔵ざらえ母の買物後まわし西宮市
優勝の祝宴派手に腹そこね八代市
テレビ見る目は別にあり老刑事見島市
金出して別れ話をこじれさせ宇部市
聴き上手時々酒も酌いでやる山形県
秋深し書棚の塵が良く目立ち大阪市
仏壇の父も引出し強意見松山市

同
上杉 青山
同 杉本たつよ
同 米浪進之助
同 宮川 珠笑
同 富永 健朗
同 松井 可笑
宮政 周防
小林孤呂二
森本黒天子
岡田花奈女
斎藤たけお
高田穂波子
室井八九寸
万代句念坊
高橋 蟠蛇
保西 岳詩
三上 芙路
永松 道雄
伊丹柳彌子
神田 豊年
菊地 白葩
安並 十七
河本南牛子

株高に人間の知恵たかがしれ石川県
立話日傘さしかけまだ続き今治市
慰める心算で訪ねてのろけられ大阪市
松虫を供に恩師の墓を訪い西宮市
追憶の父日の丸の前に立ち宇部市
道徳にカラーあるのかいのみあい笠岡市
家出の娘命の限りなどと書き愛媛市
六法をめぐる身分で恋出来ず大阪市
ゴム風船ママの愛情つめてやり西宮市
麗人の見舞へ附添座をはずし大阪市
浪曲も出来る綺麗なバスガイド笠岡市
ママパパを引張り廻す百貨店大阪市
人相があるようでないモンタージ神戸市
仏にはすまぬすぎ焼寺で食べ宮崎市
境内で儲けた香具師の不信心大阪市
晚酌がうどの風味でちと過し玉島市
秋風が立てば和服と拔目なく西宮市
牡丹刷毛休め最真に会釈する笠岡市
商魂がネクタイ締めて暑がらず宇部市
寡婦と遺児大礼服をもてあまし下関市
貯める気になつたら会社は解散し加賀市
転落の女綺麗な夢を持ち西宮市
百姓が嫌を出て来てシャベル持ち倉敷市
娘のポーズ鏡そこまでもつて来る金沢市
先生はデモリ生徒は蜻蛉捕り堺市
学童を渦中にすなど首相避暑岡山県
バスガイド寿司を貰つた手に弱り笠岡市
京人形女一人の部屋にする宇部市
子供等を遊ばせトンボさようなら大阪市

高瀬 幸路
越智 義夫
宮原 敏子
村上 球絵
鎮浪 翠月
谷本鈍愚坊
鳥井 川鳥
石原 球太
篠井しの女
山口 白帆
大内虎之助
中西兼治郎
小池 鯉一
野口卯之助
村田 肇
井上 旭峯
酒井 丹語
斎藤 如牛
篠下 一喝
宮藤 慈雨
斎藤 巖
網元 彗星
藤岡 萌芽
桐谷 紋六
武田軍治郎
大内 節郎
松本 忠三
岩原 箔川
保田 華甫

のよろめいた行動を反省しなくてはならない時が来ているのだ。

川柳になりそう な話

三栗 夜城

映画で主演俳優が川か海へ飛びこむシーンがある。ここで大抵は替玉の登場となるのであるが、夏場はともかく寒い日は手当がつく、(現在でもそうだと思う)今なら千円以上になるのではないかと思うが、ゼニのない大部屋連中にしてみれば、これモツケのせーえーというところであらう。

むかし、といつても三十年ほど前には、エキストラを雇うのに、その上映のあかつきに入場券一枚でオンの字であったが、その後は日当を出さないとおもう人数が集まらないようになった。馬と抱き合わせというのもあるが、これはほとんどスタジオ近辺のお百姓さんのアルバイトであった。

エキストラすれしたお百姓さんのなかには化粧箱を持っている人もあった。いくらノーキアツプを入念にしても、アツプ(大写し)なんか撮りっこないのに、ご本人はそのしゃく銅色の顔へ白粉をコテコテに塗りはじめるのである。お孫さんを前にまわらせて、鏡を持たせるあたり大スターそのままである。



柳風三國志

(4)

東野大八

さて夏候候は、大軍を擁して博望城へと押しよせた。

「コトメイ、コトメイと大層なウツサだが、公明選挙にも勝ったためしがないの知らねえな」とかきにかかって攻めかかる。しかし孔明の作戦はこんな男ほどスッポリとその術中に陥るように出

来ていた。見事に趙雲の逆八戦法のエサに引きこまれてこてんこてんの敗軍。十五万の大軍で残ったものわずか二百人。見事な敗けっぷり。まことに夏候候、曹操に会

わす顔がないとて自ら繩にかかって御前に出で、どうやら生命だけは助け下さいという始末。

一方関羽、張飛ははじめて、「孔明という野郎、全くただ者じやないぜ」と顔見合せて譁喚した。さて孔明

は、曹操は必ずこの仕返しにやってくる、まずその防戦の策を、と考えているおりしも、玄德が恩人

劉表が死んだ。遺言によると玄德劉奇に後目を継がせ、後見に玄德を……といったのだが、その奥方

が大の玄德嫌い、その一門の側近も同様とあって、玄德には無断で二男を跡目相続させ、曹操側に立った。しかし孔明少しも騒がず、

曹操の寄せ手よ、どんと来い、とばかり受けて立った。そして先年の曹操方の大将曹洪、許都を本攻め、火攻めで惨々に打破った。カンカンになった曹操、ありつたけ

の兵力を八隊にわけて雲霞のように殺倒してきた。孔明は玄德を江陵に身を退くようにすすめ、劉奇

に援軍を求めるため江夏へ関羽を出し、自分も江陵へ設営のため出発した。

曹操は、劉表の跡目の二男坊をたたく斬ってなおも玄德を急追したが、一方玄德は、領民五万を道

づれに張飛をしながらに、趙雲を家族の保護に当らせてのノロノロ行軍に、たちまち追いつかれて大

乱戦になった。その大激戦の最中、趙雲は玄德の奥方を見失ったため、敵中を探し回った。次々行

手をささぎる敵將をバツバツと切りふせた趙雲は、やつと難民の中にいる奥方をみつけ出した。奥方は手にした玄德の子阿斗

を趙雲に手渡し、足手まといじや、と叫んで自ら古井戸に身を投げて死んだ。その阿斗を懐るに、趙雲は玄德の後を追ったが、その

「天晴れな武者ぶり、矢にかけるな、生捕れ」と伝えさせた。こんなサムライを手下につければ立所に兵団長位にはしてやろう、という心づもりである。このため趙雲は幸い矢をうけず大暴れに暴れて、斬り殺した名のある敵將は実に五十人という。ようやく血路を展いた彼は、長坂橋でやつとのことには張飛にめぐりあった。

「翼徳助けてくれ！」とさすがの趙雲も疲労困ぱいしてかく叫んだ。

「よし、後は引受けた、さっさとこの橋を渡って主君の許へ行け」と答えた。そして彼は、唯一騎橋

のたもとにつっ立って押しよせる敵方に向ってかぶとをぬぎ、ほこを構えてつっ立っていた。やがて

趙雲を追ってきた敵將張遼、許都、曹仁らは、張飛をみて、さては孔明の策か、うかつに進んだらして

やられると、この足を踏んだらしてやがて曹操も追いついてきた。そ

のきぬがさを見て、曹操と気づいた張飛は、われがねの様な声で叫ぶ。「われこそ燕人張飛、誰かわしと勝負する者はないか」

その声に、曹操のかたわらにいた將軍夏侯惇がキモをつぶして馬からどうと転りおちた。その物音に曹操も度ギモをぬかれ、あわてて馬を返して逃げはじめた。ために、曹操方二十万の大軍はうしおが引くように、どつどつばかりにきびすを返して背走した。その退くこと五十里というから余程びっくりしたものとみえる。一説によくと、あんまり張飛の声がものすごいで、そのバク風？で長坂橋は三つにへし折れ、木は逆巻いて上手へと流れの向きをかえた、というからすごい。これを時の川柳人が見逃すはずがない。

橋

「気がつけば曹操財布まで落し

見送って張飛小便するときめ

その後にできた長坂橋建設委

さて一方趙雲は、やつとのこと玄德に追いついて、この次第を述べ、懐ろに入れていた阿斗をとり出してさきけた。阿斗は赤ちゃん、猛將趙雲の働きをよそにくぐすりとよく眠っていたのだが、それを眼にするなり玄德、

「この小わっぱのため、天晴れな將軍を殺すところであったワイ」

とその子を地になげうって怒った。趙雲その言葉をきいてハッとばかりに平伏、君恩の有難さに涙を流した。

中国かいきやく語さん、という本に、このことをやゆしたつぎの

言葉がある。「劉備搾孩子 要買人心」というのがそれ。つまり玄德はそういうことをして趙雲の歡心を買おうとしたのである。

「奴は、やれ酒だ、やれ夕めしだというが、何かコンタンでもあるというのだろうか」

「ナニニ、そいつは劉備が子をなげうったという奴さ」といったあんばいこれを中園では使っている。

今の日本の政治家連中でも、人物は趙雲ならずともなんとか自分の腹心につけようとこのテをよくつかう。いや政治家だけではなく、職場でも、対女性関係でもこのテのらん発である。要買人心こそ、人心収らんの奥の手だ、と言えそうである。

泥棒の昼寝もあてがある。という日本のことわざにも、これは通じたいそうである。

うできらわれて

閑話休題、話は実戦の方へ引き戻すと、長坂橋はまた大変なことになっていた。シナ芝居にもなった趙雲武勇伝讃歌「長坂坡」も張飛の折角の一声も甲斐なく曹操は逆襲に転じた。というのは、張飛が橋をきって落して退却したから

「あの橋をそのままにすれば計略がある。落したと知れば計略はない、玄德の軍は最早や戦意なく退いたぞ」

と曹操はそらみてとったのである。果して玄德らの運命や如何にますは次号をおきき下さい。



北川春巢

一句を語る

自作他作を問わず、とにかく一句だけ抜いて、自由に語ってもらいました。(古方担当)

扇風機の代りを妻がまだつとめ

自作他作を一句を抜いて何か語れという註文でした。これはその語る句を抜き出すのが中々の難事業です。毎月雑誌に発表される句が何千とある上に、どの号をとるかも問題です。チェックした句だけを取っても毎月十句以上もあります。その中から一句だけについて語れと云われてもその一句を選り出すのが大変なのです。そこで私は何日間も考えました。一句について語るとすれば、何かの折にすぐ口をついて出るような句を取ろうと決心しました。丁度今は夏の盛りです。お客さんにも扇風機を差し出して「ハイ扇風機！」というような洒落はよく使う洒落です。そこで私はこの句を思い出しました。

進出によって本物の扇風機を持っている家庭もふえたとありますが、まだまだ扇風機のない家庭の方が多いいのではないのでしょうか。奥さんに団扇で煽がれながら暑又一つで晩酌を楽しんでいるので。団扇を扇風機という洒落もそんなに俗悪なものではありませんし、却ってユーモアを感じる程のもので。煽がせて満足し、煽ぐことによって愛情の深さを示して奥さんもまた満足しているとすれば、家庭団扇の図のこれより上々のものはありますまい。

この句には诗情は少いと云えるかも知れませんが、愛情は充分に盛られています。また「まだつとめ」の「まだ」は、終戦以来一昨年も昨年も、いや電気製品大進出の今日において、「まだ」我が家には扇風機が来ていない、という時間的の経過を讀みとらせ、また路郎先生の云われるように、男女同権思想を無視した諷刺をもしており本当に庶民階級の家庭の状況をあらわしておると云えましょう。ほほえましいではありませんか。诗情がないとして取らぬ人もあるかと思いますが、私は家庭川柳の一秀句として推したいと思えます。

市場没食子

何処をどう来たか四十の春に逢い 晃卓

「人生僅か五十年」これはよく浪曲の枕詞に出て来る一節である、その五十年を生抜くことは中々生やさしいものではない。戦後医業の目覚ましい進歩に依って人間の寿命を十幾年か引延ばしてくれ、本当に有難いことである。でも厚生省の調査によると、乳幼児と老人の死亡率が減ったのが目だつて延命の因をなして居る、青壮年層の寿命はその割合に延びていないらしい。それはそれとして人世僅か五十年と言われた頃も、六十幾年かに延びた現在も、人間四十歳にもなれば男性にしても女性にしても、身体の何処かに生理的な変動が現れて来る、この老化現象には変わりがない。四十は初老と言う、それは生命の降り坂を意味している。

亞鈍氏の詩川柳論を衝く



西川 晃

短詩型文学相互の交流という事を、将来の川柳の進むべき方向として指示されるのは、実に重大な事であつて、他の短詩型文学から孤立して川柳の発展はあり得ないと思う。

これらの意味に於いて、詩人であり、川柳(現代)研究者である亜鈍先生が、独自の立場から詩川柳理論を確立されようとするのは、川柳界にとって大いに意義あることと言わねばならない。

路郎先生の曾孫弟子にしか過ぎない私が、菲才をも省みず「詩川柳論を衝く」などと大それた標題を掲げたのは、決して亜鈍先生の論理の矛盾を衝いて論争を仕かけるといった思い上った気持からではなく、実は亜鈍先生の理論を単に先生の独断に終らしめず、路郎先生の代弁者として、もっと普遍性のある内容にしたいのだ。亜鈍先生が自ら詩川柳理論を完全に展開する為には、相当長い文章が必要であると想像されるに拘らず、極めて僅少な紙数に、其の要旨を縮小せられたが、為に、理論に大きな飛躍を生じ、極端に独断的となり、読者に難解であつたり又誤解されたりで、此の点を指摘して、先生が再び詩川柳論を展開される際に、万全を期していただきたいと思うのが私の念願であるが、読者の注意を喚起する

高鷲亜鈍先生が、川柳雑誌に三回に亘つて断片的に発表された「詩川柳論」に対し、当然柳壇から活発な反論が出て、私達を大いに啓蒙して呉れるものとひそかに期待していたが、悪く言えば黙殺されたかたちで其後この問題に触れる文章が全然あらわれないのは真に残念だと思ふ。

川柳が短歌・俳句・詩等の短詩型文学に伍して其の文学的水準を確保する為には、当然権威ある川柳理論が確立されるべきで、作品と併行して其の作品を裏付ける理論も亦必要であることは言う迄もない。

それに関連して、路郎先生が、

枕詞が長くなくなったが、この句の良さと言うか、うまさと言うのは実に「何処をどう来たか」にあるのでこの表現即ち句語の力、即ち上手さにあると思う。不甲斐なく迎えた四十歳、只ほんやりと世間並に月日を送っている間に、又医業に親んでいる間に自分もどうとう初老になってしまったと言う悔も、うらめしさも回顧される点がこの句語の中にひそんでいる、洗練された句語であると推賞したい。この句を産むまでに句主は相当な苦心を払って修辭に努力されたことと思う、句主が現在の位置から過去をふり返り「何処をどう来たか」託して悲觀的と言うと当たらないが寂しさを詠っている。

四十では枕詞で述べているので書くことはない「春に逢い」これはお正月の表現であるから、四十歳を迎えた新年に於て自己反省をした句に解したい。この場合の四十はピンと詩の琴線に触れるし迫力も五十ではこうは来ないと思う。この場合は四十が一番適切であると言える。以上句評のような書き方になってしまったが、言わんとする所は只一つで一句の構成に当って、如何に表現がむづかしいか、それにともなって修辭がどんなに必要なかと言うことを強調したい一点にあってその例証にこの句を選んだのである。二十幾年も前の句で既に傲の生えている句

の中にはいるかも知れないが、私のいつも頭に浮んで来る句の一つである。戦後十幾年現在斯う出して眺めても決して陳腐な句として省みられざる句の中に這入るとは思わない。生命ある句の一つであろう。

今は逝き句主が草葉の蔭で微笑してこの稿を眺めているかも知れないし、或は反歯をむけて横向いているかも知れない。

句は川柳雜誌第六卷第四号の近作柳樽の巻頭に掲げられている、句主は川柳の別府支部の幹事として活躍されていたし、その頃の川柳の同人でもあったことを附言して置く。(完)

若本多久志

落城の堀に浮いてるあづま形 古句

この句はいつの時代にどんな人が詠んだのか知らないが、後世分類された処によると猥句の部にはり込まれている。然しこの作者の句意は果してそうであったのだろうか。

「句には人生がなければならぬ」と常に教えられる路郎師の言葉で、いつも一句一句を味わい、作句精進している私は、初めてこの句に接した時卑猥という感じは微塵も起らず、むしろ哀調的な人間詩、という感が深かった訳である。

る。
実に春秋幾千年、人間の世界に斗争の絶えないのは宿命とは言え悲しい事であるが、その戦いの後には必ず、醜い人間の浅ましかつた姿がまざまざと随所に露呈される。

聖戦と云われた太平洋戦争の終った後に、これでもか、これでもかという程、深刻な現実を見聞させられた事は我々の記憶に尚、新たなことであり、戦勝を誇った諸国又然りであった。

けれども我々は所詮、人間である以上、時を経るに随って遂にはこれらの事を忘却の彼方に押しやり、同じ誤ちを繰り返してゆくことだろうが、この一句はそこに人間の深い反省を求め、救いの道を顕示しているのであろう。

これを只単なる猥句として座興に口吟むことは、真に川柳人を以て任ずる我々の採らない処であり、この句意の底には

人生は悲しからずや左派と右派 路郎師の句に一脈通ずる深さがあることに気付かねばならない。(九・四)

松江梅里

大丈夫かいな京都弁の運転手 清生

為に、仮りに「衝く」などという挑発的な文字を標題に用いたのであることを、お断りして置く。

さてこれから本論に入るのだが、先ず第一に、亜鈍氏は従来の川柳を如何に考えていられるかと言つて「われわれはそこに川柳が、人間性を否定して現実を肯定する以外に、夢のかげらの一片だけに見まいとする市井の川柳家によって為されていた……」と言つて居られるのであるが、これは余りにも一方的な独断的な見解ではなからうかと思われる。

西欧精神を基調とした現代詩のしかもロマンチズムに偏重した立場からのみ、日本の川柳を論ずる事は、外国人が片眼で日本人を見てそれを批評するようなもので、鋭いところを衝いていたとしても、全面的には正しい観方という事は出来ないのではなからうかと考へる。日本人の伝統的な立場というものも考慮に入れて、更に詩精神の在り方というものとはどんな時代でも同じ形であられるものではないという事も考へられ、もう少し深く川柳及び川柳人を観察していただきたいと思うのである。

次に「詩人とは宿命的な存在で、宿命的な詩人の作る詩川柳を俗物的凡庸人である川柳家がいくら勉強しても飛び上って真似しよ

うとしても絶対に詩川柳は作り得られるものではない」というきびしい論に対しても、私は首肯し難いものを感じる。そしてそれは、氏自身が規定していられる人間性、「人間性には詩性と俗性の相容れざる異質な人間の存在がある」という認識とも矛盾しているのではなからうか。普遍的な人間性に詩性と俗性があるのであれば、たとえそれが氏が俗物の標本として挙げられた「下駄屋」であろうと「肉屋や散髪屋等の市井」の人間であろうと詩人であり得るわけで、詩人は何も宿命的存在であらねばならぬという理由はないと思われる。

強力総合ビタミン剤
強力パンアミン
三錠(900円) 10錠(2,500円)
大阪市浪速区 武田薬品

体力をつくる

日常我々が喋っていることを樺訛にしてそれがびったり句になつてゐる。しかも京都人のおっとりとした味が描写されている。昔から京は王城の地として知られ、なんとなく悠長で落つきがある。殊に京言葉とか京訛りとか伝えられるとおり京都の男子も自然にやわらかな感じを受けられる、そこに「大丈夫かいな」と言う上五が生きてくる。同じ関西でも大阪の運転手は血走っている。稼がなかなかの気魄が伺われる。京都ではあまり神風タクシーなど聞かない。

タクシーに限らず自転車に乗っている人でも京都と大阪では違ふ。例えば野球放送のラジオを店頭で立聞きしていても京都の人は自転車から降りて聞いているが、大阪の人はそうでない乗ったまま片足はペダルにつけたまま耳を傾けている。試合終了のサイレンと同時にペダルを踏んで駆け出す。また同じ運転手の句に路郎先生の詠まれた「霊あらば化けて出てやれ運転手」と言うのがある。今もなおタクシーの運転手殺しは跡を絶たない。僅かの稼ぎ高を奪うに虫けらのように人を殺めるとはなんと恐しい世相ではないだろうか。京都では運転手殺しは極く稀れである、やはり大阪は被害が多い。京都の方は感じややさしいの用心深く無理をしないことも一因だろう。大阪の方はあまり商魂たくましく過ぎてつい無理をする、少し臭

いなあと思つても深夜を稼ぐ、これがいけない。

私の知っている被害運転手の遺族妻子三人が不幸な苦しい生活を続けているが、今以つてその犯人が検挙らない全く霊あらば化けて出てやれ運転手である。結局は大丈夫かいな京都弁の運転手の方が事故がなくてよい。

正本水客

女よよと泣いている間の手持無沙汰

私の旧作である。新国劇のたしか「霧の音」の舞台を見ていて、サツと浮んだ句である。6音、13音と2音だけの破調であるが随分字余りの様な気がして、色々推敲してみたが、どうにも動かしようがなかった。だが何度も読み返しているうちに、これはこれなりに一つのリズムを持っていると思えてきた。

さて私は何を言いたかったんだろうか。先日朝日新聞の虚子俳話にこんなことが載つていた。

「昔の歌は朗詠した、朗詠せぬまでも心の中で吟詠してみても成しているか、いないかを吟味した。その調べというものは、絹糸の織りなすアヤの如きものもあろう、飛ばくのいわおをつんざく如きものもあろう。千差万別であらうが、とにかくその調べという音

楽的要素が多分にあつた……」

音楽的要素とはリズムの意であらう。破調の句が始めは物珍らしく思われるが、段々、胃にもたれてきて飽きられるのはリズムがないからであらう。自由律の句といえども「律」という以上はリズムを無視しては成り立ち得ない筈である。

川維七月号で春葉さんが「音韻について」の研究を発表しておられるように、俳句の際、意識して韻をふむことはないが、推敲しているうちに、リズムの流れがそうさせる場合も多いと思われる。

句主の呼吸であるリズムというもの、私達ほもつともつと大切にしてゆきたいものである。

八木摩太郎

一句を遣せ！かと思うと「一句を語れ」と、編集部からの消息である。その編集部末端に連なる私として、

貧しきは時に罪なき子を
叱り
鉢朗

の私の愛踊句を語ることにする。

抑も川柳は、定型詩として、人生及びそれから生ずる諸種相、生活、その見聞、感情等凡て川柳の内容として、人間観の存在である。

勿論、先天的な性格に於て詩情に富んだ人間と詩情の薄い人間があり、社会環境や職業等の関係で、その詩性を殆んど埋没している人等のある事も事実として認めるが、然しそれから直ちに詩人は宿命的存在であると断定する事は余りに飛躍しすぎていると思われるのである。私は八公、熊公といえど詩的感動を受ける瞬間はあり、又立派に詩人たり得ると考える。それは亜鈍氏が言われる如く人間性には詩性と俗性の二つがあるという説に私も賛成だからである。

さらばこそ路郎師が、この散文的な商業都市である大阪に、川柳雑詠を主宰して川柳に生涯をかけていられる意義があるのではなからうか。

「現実には散文であり、人間も亦散文である」と断定されるのは氏自身身の論の中にある人間性の中から詩性を採殺して俗性のみを取上げると矛盾を氏自ら冒しておられるものと言わねばならない。尤も、偉大な大詩人は或いは宿命的存在であるかも知れぬが、詩は彼のためにみ存在するものではない。

次に一月号に「即ちここで川柳人を定義づけるなら、詩性的人間実存を言うのであって、その所産が詩性的川柳である」と言われている言葉と、五月号「柳論は花嫁」中に書かれている「現代川柳には詩川柳とその対抗馬としての

散文川柳が存在することによって文学主流に於て現代川柳を促える事が出来る」という言にも矛盾が感ぜられる。一は詩川柳のみが正真の川柳である如く思われ、一は詩川柳と散文川柳の二つを同じ位置において文学的に価値ある存在として認めていられる様であった、氏の論に一貫性がない様に思われたが、或いはこれは私が氏の言葉の意味の受取り方を間違つたのかも知れない。

氏は更に、散文川柳は散文精神による散文句であると定義し、散文精神とは文学思潮に移せばリズムになる」と論断せられてゐる。これはつまり文学上のリアリズムは詩ではないと断定されている事になる。美を追求するロマンチズムが詩であり、真を追求するリアリズムは詩ではないという論は、現在の私にはどうも理解しがたいことである。

これは例をもつて言えば、実感がみずみずしく賑わっている万葉集のリアルな歌は、散文であり、現実と遊離して観念的な風雅な世界を詠い上げた古今集の歌は詩であるという事になり、実相観入を唱えたアララギの斎藤茂吉は俗人で、明星派の興野鉄幹は詩人だ、という事になるので、これは私のみでなく、大多数の短詩型文学に関わりを持つ人達には全面的には首肯しがたい論ではなからうかと思ふ。或いは私が浅学である

り、単なる十七音字の詩型とは言え、日本人の詩心を盛るものである事も、此の句に依って、充分感じられる。此の句に秘そんでいる一家のやもやが、まさまじと魅せられ、人生苦、生活苦を、十七音字の詩型によって髣髴させる。誠に十七文字の魅力も大なる哉である。

川柳する事に依って、人間が陶治される。川柳は人間である。川柳は、人間陶冶の詩であるのも、うなずけられる。

川柳は、文字の遊戯ではない。皮肉、洒落を主題とした古川柳の所謂「川柳三要案」時代は一顧の存在すらせなかつた女性が、近代詩性川柳作品の出現と共に、嫌厭された川柳が澎湃として女性作家を生むようになったのも、その内容が、女性の心に、マッチするからである。

一体、貧乏の原因については、八種類あるそうだ。病気に依る貧困、天災に依る貧困、事業失敗に依る貧困等々、その重なるものらしい。喰い倒れはしないが、病み倒れするそうだ。貧より辛いものは無いとも、金の無いのは、首の無いようなものだとも言う。険しい人生を如何に、泳ぐかが人生哲学である。

猫かわは猫がわが家の争いの種となるらん悲しきわが家と歌人啄木も詠んだ。「金の為めに人は死し」「金の為

めに罪を犯かず」人生と金！乍然、清貧に居ても、川柳する事に依って、人生をユーモラスに、心の慰みを川柳に求めて、しかも、耐乏生活に何一つの味は無いとも、川柳の醍醐味を以て、楽しい人生を送る川柳生活を謳歌しよう。川柳は宗教だとも言う。悟りの芸術でもある。誠に川柳は人間であると言う事も肯ける。川柳は共感の句で、此の句に曳かるる者は、蓋し、私一人では無からう。

丸尾潮花

妬きもせず存在無視をされたまま 梨花

八月号の近作柳樽より、何か此の句が私の様な常に異性の方を参照とする生活の多い者にとってチクリと針を射される様な感じがして此の句を引抜いて見た。此の句が作者の実感から生れたものであるか、又は作者の身近なひとから取材されたものかは論じる必要は無いが、相手が異性であると言う事だけは、上五の妬きもせずと言う言葉に依ってうかがい取れるし、その異性なるものが、夫、或は愛人と言う何か深い関係にある人物であると言うこともうかがわれると思う。或場合自分のそばに居る妻や愛人を忘れているとか、此の句の様に見無視していると言うのではなく、たまに逢うた

懐かしさや親しさから、膝を突き合せたり肩を並べて語り合い乍ら夜の街を歩く時もある。それがたんなるお付合程度のものではなかつたとしても、無視されたと感じ取った時に果して此の句の様には妬きもせずと言う言葉が当てはまるだろうかと言う事も私なりに考えても見た。時として此の様は感情にある場合もその人としては有るだろうが、多くの場合そこには少くとも無視されたと言う以上は心がしがみつきと言ふものが心の底をかすめ去って行くものと思われ、そしてその淋しさ、やるせなさと言つたものが、大なり、小なり嫉妬と言うものに連つてゆくと思える。作者は妬きもせずとハッキリ言い切っているが、言い切つたところにかえっていくばくかの淋しさがあり、嫉妬がある。妬きもせずは、女性の心の弱さから反ばく的に来る虚勢でもあると考へるのは私だけだろうか。

句は存在無視と言う言葉を漢字に依って鋭い言葉で感情を現しているが、此の文字の強さがかえって哀れさを見せ、下五を、まま、と言う柔かい語調で結んでいられる。この、ままの柔かさが強く響いていて、そこに女ごころの淋しさが匂うている。何にしても、此の「まま」が此の句の全体を構成させていると思える。

為に、作者の意図を、充分に察知できていないのかも知れぬが、氏の文章にあらわれた限りに於ては、リアリズム(文学上の)は詩ではない。川柳はリアリズムだ。だから川柳は詩ではない、という甚だ明快な論法と受取られる。リアリズムが如何なる型態をとろうとも飽達も散文であり、非詩であると言う論が完全に成立するものであれば、川柳は詩ではないと論断されても、そんなに過誤とは言えぬであらう。

然しリアリズムが何故詩ではないのか？これは氏自身の論理をもって更に分り易く説明していただかないと、単に天下りのリアリズムは散文だと教祖の御宣託の様には言われても、なかなか凡俗には理解し難いのではなからうか。何故なれば一般には(私をも含めて)文学に於けるリアリズムはロマンチズムと同様に詩性があると考へられているからである。

萩原朔太郎は「現実が散文であって味気ない」と言つたそうだが、「現実の中にこそ詩があるのだ」と考へている人も少なくないし「民衆の叫びの中に詩の言葉がある」と思っている人も多いと思う。勿論此の場合のリアリズムとは、単に皮相的な世俗的な意味の現実ではなく、内面的なものも加わつた実相とも言うべきものであり、又知識として固定されたものや狭い経験のみに止まるものでなく、

其の経験を通して想像される世界をも含めたものである。そして其れは実際の「感動」を伴つたものでなければ詩と言えぬであらう。従来の川柳の総てが詩であると言ふのは全くの無稽であるが、さりとて現在迄の川柳の総てが非詩であると断定することも又私には無稽に近いものがあると思われ。亜鈍氏が言われる詩とは一体どんなものであるか。私はそれを知りたいと思うのである。

甚だ不遜な言辭を弄して申訳ありません。亜鈍先生には「何を幼稚な事を言つてるんだ」と笑われるかも知れませんが、熊公八公の一人である私が、先生の詩川柳論からこんな疑問をもつた事を正直に申し上げて御教示を請う次第です。(完)

味の七-1

モダン 川柳

心育橋大丸北の辻東へ

御門

TEL 6684

御集会には階上御利用下さい





師直の戀

富士野鞍馬

中年になって師直色気づき

(タル七)

曆応二年(一三三九)。足利尊氏の執事、高武藏守師直は四十三歳であった。その師直が、塩谷判官高貞の妻、顔世に恋をした。

顔世は、早田宮真覺の女で、宮中生活をしていた、絶世の美人であった。前に、一の宮の御息所となり、一男を生んだが、宮が戦死の後、連子して、塩谷高貞と結婚して、又一男をもうけ、五辻大宮に住んでいた。

その美貌の噂をきいて、師直は、まだ顔を見ない顔世へ、艶書を送った。その艶書は、当時歌道の四天王の一といわれ、「徒然草」の筆者吉田兼好が代筆したということになっている。それで古川柳は、つれづれの外にまいらせ候も書き (タル二〇)

兼好はあつかましいとあとでいひ (拾四)
ただも居られず師直は墨をすり (タル三三)

と、見てきたように作り、兼好は中宿などもする気なり (拾四)

男女密会の中宿もする気——と茶化している。そして、師直が事を頼阿と話して

歌道四天王の一の頼阿ともこの話をしただろうと、広い観察である。 (タル四一)

高の師直と鑑をわるくいひ (タル十三)

「徒然草」には、鑑は上流の食うものではないと書いてあるので、こんな句もある。ところが、この艶書には返事もなかった。しかし、兼好が書いたのであるから、知れてるに師直の御自筆さ (傍五)

文と手に塩谷が妻も感じ入り (タル一〇)

兼好の文つれづれと返事せず (傍二)

ということであつたであらう。しかし返事はなかった。のぞまれた上に兼好不首尾也 (タル十四)

当時権勢の師直であつたから、不首尾という結果だったかも知れない。 (タル二二)

今度は頼阿に書かせると師直 (タル四三)

これに失敗した師直は、薬師寺公義にたのんで、歌を作ってもらい、その短冊を持たせてやった。その歌は、返すさえ手やふれけんとおもうにぞわが文ながらうちも置かれず

というので、前と同じ侍従の局が持つていったが、その返事は「重きが上の小夜衣」と、口で言っただけだった。それは、新古今集巻二十にある、さらぬだにおもきが上の小夜衣わがつまならぬつまなかさねをいっただもので、夫以外につまはかさねぬ——つまりおことわりである。

師直は、その意味がわからず、薬師寺に教えられて、ようやくわかったが、あきらめなかった。

吉田でもてこでもいかぬ小夜衣 (タル四七)

師直が無念返歌の新古今 (タル一四)

さよ衣つれづれとした返事也 (タル二六)

薬師寺と兼好返事にこまり (タル三九)

さよころもやつとはんじてはらを立て (タル二二)

古今の歌に師直が願書

ますます恋慕の情はつものり、師直は周男はれてするつもり (タル九)

絵に書いた餅を師直くひたがり (タル十一)

というわけで、ある宵、侍従の局をつれて、塩谷の屋敷へ忍び込み、顔世を覗き見ようとした。たまたま、顔世が風呂から出てくるのを見た、のぞいたがさいご師直立ちちすくみ (万安二)

またぐらのよふ押をする執事職 (万安九)

浴衣にて拭くを師直よっく見

川柳不洞会員のシンボル
美しいバッジが出来ました

スマートなデザインは、キツトお気に召すものと自負しております。
(1個200円・送料8円)

申込所 大阪市住吉区万代西五丁目二十五番地

川柳雑誌社
(振替口座大阪 75050番)

川柳歳時記 (4)

水谷竹莊

秋の巻 (三)

相撲とちやんこ料理

国技館足らぬ力は飯を焚き
三太郎

る (タル十)
鼻息があらいくと侍徒い (万安九)
端近い湯殿塩谷が落度也 (七五)
からくりのやうに師直のぞく (タル四四)
也 (タル四四)
据風呂の図は師直が書きはじ (拾六)
湯上りを見せて侍従は元直に (拾五)
し (拾五)
一説には、はじめ湯殿をのぞいて、見初めて、それから艶書となったともいうので、川柳は、その方を採っている。
小夜衣ついにやぶれて切れかかり (タル五〇)
師直は喧嘩にしてもする気なり (末二)
遂に師直は、塩谷高貞を亡して顔世を奪う案をたて、高貞が南朝と通謀して、出雲、伯耆に挙兵する——と尊氏に讒言した。それを知った高貞は、行がかり上、自分の居城出雲富田城へ引揚げる途中、顔世は、播州、酒井の里で追手に攻められ郎党の手にかかり果て、高貞は、それをきいて、出雲、玉造白石の里で自刃した。

この事件を、作者竹田出雲は、浄るりの「仮名手本忠臣蔵」にとりいれたのであつた。

の栄養料理で、牛、鳥、魚、野菜、いろいろなものをつきの鍋でグズグズ煮て食うのである、すべて相撲取の手製料理であるところに、特徴と値打がある。
どの位食うと関取たすねられ
天平

「ちやんこ」のちやんは親父というほどの意味であるう、始めはちやんこ料理の料理人は長年相撲界にいて遂に意を得ず、三段目あたりで年をとってやめた力士が、力士たちの故事の面倒を見るようになったことから、若い力士が、親しみの意味で、ちやんこと称したのではあるまいかといわれている。
それが今では必ずしも、そういう特定の料理人はなく、序二段以下の若いものが交代の順番で料理を担当するようになったから、それをちやんこ番と呼ぶことになったのである。

相撲取ぜんたいどんな親が産み
花酔
土俵入臍の下からピラを
下げ
花酔

ちやんこ料理は部屋で食べるだけではなく地方巡業の昼飯も多くはちやんこ料理である。そのためには巡業先へちやんこ料理の道具一式を持って行くのである。相当

の荷物になるが、地方の宿から相撲場へはこぶ臍の程度では、とても消耗した体力を恢復することは出来ないのである。
しかしこのちやんこ料理といえども、力士間にはげん格な階級の規律があるのである。

食事は、関取、幕下、大部屋という順である、そして代り番んこに給仕をする、いくら腹がべこべこでも兄弟より先きに食事にかかるとを許されぬ、つばをのみ、のどを鳴らしながら関取衆がうまそうに、ちやんこをつつくのを見ている外はない、関取衆がすむと、こんどは幕下、三段目、それからやつと新弟子になるのである。

その時分は、せつかく自分達のこしらえたちやんこ鍋には、鳥や牛の影は見えず、わずかに野菜の切れっぱしと底に沈んだ汁があるばかりである。しかしこの残りの汁の味が格別で、雑炊にすれば結構おいしく頂けるところに大部屋連中のたのしみがあるのである。
全勝の力士へテレビ小さ
一朗

秋と松茸料理

松茸を一つ貰って秋を知り
竹莊

秋の松茸は香りも高く、佻びて、豊かで、なんとなく豪華な夢を秘めている。昔から王侯の富豪の、粋人の、そして庶民の台所に至るまで、何百年かの歴史をもつた料理法が、秋の来る度にむしかえされている。
その中でも土瓶蒸や、焙烙焼は、さびて、風雅で松茸料理の粹ともいいうべきである。松の風味は軸に含まれ、香りは主に傘から放出されるが傘が開らくと水分が失せて軸が、堅くなるから、やはり未開の太軸がうまい。
また小さく生じたのをこる松茸といひ、裂かず形のまま料理するのが普通である。
信州松茸には虫食いが少ないという事は、関西ものには虫食いが多いということになる、うまければこそ虫がつくといふのも関西人の郷土自慢の一つだ。
茸山でとった松茸は、蒸葉や枯枝を焚いて熱灰に埋める、丈夫な日本紙の濡紙に包めば灰で汚れることもなく程よい蒸し焼となる。
焼松茸には、ボン酢醤油がよい、ボン酢とは橙、または、スダチから絞汁をとり、醤油をまぜてつくる。
昔風の土瓶蒸は、大きな土瓶に松茸を入れ酒を振って蒸し焼にしたものであるという。会津では今でもその名残りをとどめた土瓶蒸があるとの事である、しかし現在では、京都大阪の本場ではお座敷用のしゃれた小土瓶が幅をきかせて、近代風な吸物代りに変りつつあるようである。
うどんやの松茸紙の様に
切り
竹莊

入門講座

研究題 「まんなか」

戸田古方



「まんなか」の反対は「はし」で、形の上でも、形のないものでも「まんなか」は落ちついた安心感のようなものが感ぜられます。したがって句の上にもあまりかわつた想いのものは見あたりませんでした。

マン中ニ入ッテト 駅乗り過シ
十七
まんなかへ押され一駅やり過シ
八九寸

「入ッテ」と「押され」だけがちがって、あとは同想といえます。しかも、よく見るとちがいはそれだけでありません。

マン中ニ入ッテト 駅乗り過シ
まんなかへ押され一駅やり過シ

○印をつけておいたように、いろいろのところがちがっています。「マン中」と「まんなか」です。が、ひら仮名だけの方が型通りで、常識的です。「マン中」は古人ならあまり使わないうり方

れます。静けさとはげしさを感じます。

こういう風に同じ題材で、同じ構想の類句も一寸したちがいで環境、年齢、個性などがあらわされるものであります。

一句につかわれなければならぬ言葉なり、用語法なりは一つしかないとい心得て、充分に練って、軽はずみに句を作らないようにしたいものです。

常識という言葉があります、中庸という言葉があります。こんどの研究題「まんなか」と通じるものがあります。

最初に申したように「まんなか」は落ちつきとか、安心とか、安定とかで、あとで御紹介するよう「まんなか」のよるこびを詠まれた作品の方が多いようでありますが、ここに引きました十七さんと八九寸さんのは、あんまり安心、安定しすぎて失敗した。乗物のまんなかに入りすぎて、おりにときにおられなかったというのであります。

さき程、二句のちがった用語が「押され」と「入ッテ」でありました。「押され」は自分にまんなかへ入る意思のあるまじにかかわらず、押されて自然にまんなかへ来てしまったということになります。「入ッテ」の方はまんなかに入らないう原因にはあまりふれてはいません。いうならば自分の意思がかなりはたらいいてるともいえるのです。

麻生葎乃著・米田三男之介装幀

葎乃
句集
福壽草

定価二百五十円
送費 三十円
菊半型・函入

本書は川柳の母・麻生葎乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいで居ります。

大阪住吉区万代西五の二五

発行所 川柳雑誌社

郵政口座六取七五〇五〇番 電話住吉(四)六〇八一

この区別にも、やはりウエツトとドライがありそうです。

ドライならドライ、ウエツトならウエツトでいいのですが、とにかく、句をつくる時、句主は精神統一をして、外界のあらゆることからなれることが出来ます。この句の中の人物も、車のまん中にただでなく、句でも考えていたのかもしれない。精神を統一するといつても、川柳は人間詩です。すから乙にすまじたり、人間ばなれしてしまふことではなく、人間そのものを取扱い、人間の心や行動の中へ喰い入っていいのです。

又それがために句主の現在とどこめられている人間的な苦しみからのがれることも、かえって簡単に出来るのかもしれない。

ものいわざれば腹のふくるわさとか、いいたいことを穴を掘って、穴のなかへはいって埋めたとか、昔からいいますが、川柳を通して、人は人生を客観的に第三者

の立場に立ち、いいたいことを川柳という穴にすべてはき出してしまえるのです。

川柳でもする人はものわかりがよいとか、人間的に出来ているとかいうのもこのことをいいうのでしよう。

常識の世界では妥協も必要です。し、心にそわないことはいつたり、したりせねばならないでしょう。それが自然に出来るのは作句の世界を別にもつているからなのでしよう。作句の世界ではスーパーマンのように常識を飛躍したり、常識を批判したり、又常識を賞めたりすることも出来ます。誰からもわすれられずに自由にふるまえるのです。だから年配の方必ずしもウエツトな句を作り、若い方がドライの句を作るとは限りません。けつこう反対もありますし、自分の属していない世界を句にも出来ます。

しかし、そうしたとき、どんな

ことをやっても、それがいつも佳句になるとは申せません。この引例句のように、おおえども、おおえども本然の姿が出るものなのです。

自分の句にはすなおに自分のすがたがどっかにじみ出てくるものです。だから自分の句をじつとみつめると、はずかしくも自分のいいところも悪いところもあけすけに出るものなのです。

ことに麻生路郎先生の御指導の仕方は個性の伸長にありますので、句のスタイルまで長年作っていると他人にまねられないものになって来ます。それはおそろしいくらいです。

- ① 丸かいてそのまんなかに 鬨男 灸をすえ
 - ② まんなかに立ち豊年を見る 案山子 周甫
 - ③ 妻の留守まんなかに 岳詩 床を敷き
 - ④ まんなかの赤い日の丸色 悟朗 あせて
 - ⑤ まんなかの赤い日の丸ク レイオン 句念坊
 - ⑥ まんなかをそつと夜なべの子に残し 歌子
 - ⑦ 見られてる西瓜はまんなか 敏子 敏子
- 特に「まんなか」のよろこびの句ばかりというわけでもありませんが、
- ①は情景を浮べられる句、丸をかいて、そのまんなかというか、一

点をおろそかにせぬ真剣さがうれしいです。②と⑥は善意にみちた句です。⑧はなかなか複雑で、恐妻みたいにも見えますね。④と⑤とは同じ日の丸ながら、④ははつきり「色あせて」と意思を出して

いますが、⑤は「まんなか」にものをいわせなければなりません。⑥の方が単純に受取れます。クレオンでそれが絵であること、子供であることがわかります。何かしら景気のよい場面ですね。④には古い時代のもの日の丸の荘重さも感ぜられますし、未だに日の丸へ

割切れぬ気持をあらわしたものととれます。もっとよく考えてみましょう。最後の⑦は夏の西瓜割らしく、ほかに「まんなか」を割った句が二三ありましたが、「まんなか」を割ったのでは別に奇もな

いのですが、この句には「まんなか」でなかったところに人間らしさが出ています。あがったのです

か、「まんなか」を切りそこねたのですね。人間をいわずに、見られているものを西瓜にしたのもうまいと思います。

川柳のライバルさん

内藤きさ子

喧嘩、下駄まつりで名高い岸和田のお祭が済むと、秋は急テンポでやって来る。

酷暑から解放された今、天高く肥ゆる馬と共に、また「作らんかな」の作句の季節でもある。

澄みきった青空をよぎる鳥の姿も、うすむらさきにひそと咲く野菊も、草むらにすたく虫も、みんなみんな秋のよそおいをこらして私たちを幻想の世界へつれてい

研究題「きもの」
切 十一月十五日
発表 一月号予定
宛先 豊中市本町三丁目二〇一
戸田古方

春はあけほの、夏は夜、冬は雪景色と、田園の美しい四季にこまれながらも、走馬燈のように目まぐるしい半生を過ぎて来た私に、いつも離れず影のようについて来てくれた友……川柳……いつ

とはなしに、いつのまにか川柳は私の体内に深く住みついてしまっ

た。いまさら川柳と別れようとも思わないし、また別れることも出来ないだろう。

金 泥 集

麻 生 葎 乃 選

課題「湯気」

- バスタオル湯気一緒と子を貰い 阿茶
- ミスト風呂湯気湯気の中で生き 同
- もう湯気が立たなくなつた母の膳 美舟
- 湯揚げから湯気立ちのほろ孫を抱き 同
- 鉄瓶の湯気は恋しいひとを待ち 千代美
- 湯気忙し古い毛糸が持ち出され 若芽
- 此の辺に山の湯がある湯気なり ひさみ
- 栗強飯そろそろ蒸せる湯気になり 吟女
- 街角の秋へ屋台は湯気をたて きさ子
- あつかんの湯気が女の鼻をぬけ 花代子

- ハンカチの外へ焼芋湯気をたて 俊江
- 蒸膳の湯気へ還らぬ子のはなし 陽子
- タイムスリッパお諸の煮えた湯気が切れ 知恵美
- あの竿この竿湯気立つ空は晴れたり 万女
- 御先祖へ湯気参らせると茶湯する 奈良子
- 味噌汁の湯気はほろ朝を出る 清子
- 野天風呂湯気に向うで笑い声 風の子
- お茶席の湯気席入りを持つはかり 葉乙女
- 湯気をたてたてて混浴あがられず 美喜
- 湯気ホカホカおさつを出して女客 花鶴美
- べール着たように裸婦湯気浮き 美音子
- 味噌汁の湯気へ深酒もうすまい 春栄
- 急ぐ旅食事の湯気を宿に置き 知恵
- 岩風呂の湯気の中から見景色 玉枝
- 秋近く毛糸をのばす湯気を立て 女
- 湯気のとつとん残業忘れさせ 都詩子
- 七色の湯気台所の夕仕度く 銀子
- 湯気立つおしほり姑の背をさする たつよ
- 湯気立つお芋へ稲刈の鎌を置き あやめ
- なべ焼きを吹きつたらぶ子らの顔 寿子
- たつ湯気へ広い背中たたくまき よし子
- 湯気立つ御飯供える嫁の出来 周甫
- 御隠居の風呂おつむから湯気のため 一栄
- むし芋の湯気こら来てついで見る とよ

りも、川柳が好きになった自分に幸福を見出している。小さい頃から、童謡を見たり、作ったりするのが好きだった私が、川柳を知り、水を得た魚のように、それに飛びこんでいったとしても、何の不思議もないことだが、究めれば究めるほど、奥深い川柳の泉に、何度かつまずき、壁につき当り、泥中にはまりこんでしまったことだろう。

それなのに川柳は、少しも私からはなれず、時には遠くから私を手招き、また時には、おどろくほど耳もと近くで、私にささやきかけてくれた。すばらしい秀吟に接した時のおどろきとおそれ……体内の血が逆流するようなショックを受ける。ジーンと目がしらが熱くなるような句、秀句は生きもののように、私達に呼びかける。血の匂いがするし、血の流れる音も聞える。

(36頁へつづく)



路

集

女子大

戸田古方選

平凡な妻の座もよし女子大出 曉明
 女子大へやれば演芸部で踊り 夢路
 女子大をハンドバッグで卒業し 鬼美
 女子大出ながら日柄をやかましく 八九寸
 貰われた末っ子だけが女子大出 珠笑
 口紅も板についてる女子大生 鳴恍
 女子大の顔が少うし気に入らず 牧人
 水泳が上手で女子大まで進み 幽谷
 男なんか男なんかと女子大出 保美
 婚期逸した女子大出を聞い 一休
 アルバイトもした女子大の薄化粧 同
 女子大へアクセサリーのように行き 岳詩
 話せると思つたら同じ女子大卒 敏子
 女子大の寮の灯りがもう消され 宗太郎
 女子大を出た出戻りが起きて来ず 虹要
 女子大出持参金までつく悪さ 満秋
 女子大の妻セックスも科学的 三四郎

賢夫人女子大卒を口にせず 陽子
 ソバ杖を食つた不覚の女子大出 豊年
 不器量をせめて女子大まで行かせ 鶴汀
 女子大へ入れて何にする何にする 淀月
 物議りの祖母ちゃん聞けば女子大出 幸路
 制服へ女子大乳房をつつみかね 実男
 女子大の履歴が生んだトップ記事 進之助
 女子大さえ出れば才媛かと思ひ 恒雄
 あの娘女子大出たと涼み台 兼治郎
 女子大の制服女がこぼれそう 雄峯
 就職も給仕からだと女子大生 旭峯
 女子大生和服姿は肩がはり 慈雨
 味噌汁をスリーブだなど女子大出 春雄
 専攻でない女子大の飯が焦げ 漫歩
 女子大出養老院で日向ほこ 美音子
 スチエノヴィエ母校大学眼下に見 同
 結局は二号に墜ちた女子大生 三林坊
 学生妻これも卒業までのこと 吉枝
 デカンショも出る女子大のクラス会 圭井堂
 女子大で益々苦境にあるニキビ 九呂平
 女子大のこの辺追剥出たところ 不二

この女子大へ入りたかつたパスガイド 同
 女子大の学生証で見直され 歌子
 化粧せぬ女子大生で智性めき 十九平
 女子大の庭一面の萩の花 同
 五客
 女でもいいと女子大出しておき 紋六
 女子大の門を平気で出前持ち 雄峯
 女子大の教室女でむせかえり 狂風
 女子大生ただ何となくことわられ 勝彦
 女子大生寒家は遠い雪の国 鶴汀
 人
 見合から帰り女子大辞書をくり 牧人
 地
 ゆり籠へやさし母さん女子大出 卯之助
 天
 女子大の昔の魅力を語る母 圭井堂
 軸
 目白出という奥様の束ね髪 古方

靴磨き

友淵貴山選

靴磨き都会の狡れ目に感じ 夢路
 靴磨き僕の青春に加勢する 笑太
 靴磨きに木虫の葉聞いてみる 罔男
 よい場所は兄貴に譲り靴磨き 香雄瑠
 靴磨きの頃はステーションだけのもの 鬼美
 案の定お釣がないと靴磨き 虹要

主知らぬ靴磨かれて磨かれて 恵二朗
 靴磨き悲劇のヒロイン一人居り 狂二
 巨人ファン誇る日比谷の靴磨き 淀月
 語らせば皆薄幸の靴磨き 初甫
 今日からは妻と言う名で靴磨き 蜻蛉
 よれよれの服が身につく靴磨き 南宗
 靴磨き十一文だなどと思ひ 実男
 靴磨き只で磨いたボスの靴 義夫
 心に灯靴磨きつつ持ちつつ 隆文
 靴磨き夜の女に励まされ 牧人
 労基法言っておれない靴磨き 庸佑
 靴磨き笑うて身の上言わざりき みのる
 磨きつつとうとうた歌の金もやり 好子
 パトカーの音にも馴れた靴磨き 保夫
 靴磨きうっかりゴムへ声をかけ 晃康
 秋の夜はどこか淋しい靴磨き 鶴汀
 俺とこに無い墨のある靴磨き 豊年
 本籍がどこも知らぬ靴磨き 幽谷
 新妻の磨いた靴と叫びたし 保美
 靴磨き何時もの客に手を休め 半休
 靴磨きした金で買う講義録 健朗
 大時計見上げてひまな靴磨き 一傘
 靴磨きばつとつばきで艶をつけ 句念坊
 社長代理でばろ靴磨かせる 宗太郎
 同情はしてはくれない靴磨き 昌男
 失業の父が磨いてくれた靴 三四郎
 甘えたい時もあるだろ靴磨き すみ江
 此処に又人生があり靴磨き 進之助
 風に舞う紙屑見てる靴磨き 光郎

靴磨き一番星と亡母の顔 芳仙
 靴磨き靴ずれしてるのを見抜き 一鶴
 女関にチップの利いた靴光る 八九寸
 プン屋だと知って黙口な靴磨き 葉光
 靴磨き聞けば父ちゃん無いと言う 華甫
 靴磨き親孝行を売りもせず 銀子
 一握の砂を読んでる靴磨き 珠笑
 靴磨くゆとり三年議員席 一進
 職人の俺より稼ぐくつみがき 愛場
 定時制へ通う靴磨き無口 むじな
 靴磨きやっぱり笑う顔を持ち 三林坊
 丸い背で強く生きます靴みがき 弘介
 夢を呼ぶ歌は「まり子」の靴磨き 肇
 靴磨き列んだ内にある人奴 兼治郎
 無作法な足をにくんだ靴磨き 美音子
 靴磨きしても盗みは致しません 雄声
 靴磨き花売娘の来る時分 春雄
 ミス靴磨き柳の蔭で風を入れ 慈雨
 末っ子はコートバンだけ磨いと 圭井堂
 靴磨き子供に頼んだ事を悔い 吉枝
 靴磨きへ踏まれた方を先に載せ 白溪子
 靴磨く時間が男起きられず 白帆
 更生へ刷毛と靴墨おくられる 蘭
 靴磨き迷惑至極なかねを打ち 歌子
 姉弟で美談を生んだ靴磨き 七面山
 靴磨き商魂あつて椅子を置き 十九平
 靴磨き勤先まで当てちまい 忠三
 政治より見放された子の靴磨き 尉介

靴磨きポケット瓶をソックとなめ 鳴恍
 靴磨きなる程という場所を占め 晓明
 五客
 靴磨き上りの客を奪い合い 代仕男
 三袋の心で今日も靴磨く不二
 靴磨き足を附風のように見る 圭木
 親分がいてさと笑う靴磨き 卯之助
 靴磨き追うて警官淋しい目 さぎす
 人
 赤い羽根^{シロヤンボーイ}の胸でゆれ どんたく
 地
 生活を泌ませた布で靴磨き 敏子
 天
 靴磨き駅の勤務にして通し 藤波
 軸
 赤と黒同なじ布で靴磨き 貴山

風船

杉谷湖山選

風船をたいてしごいて派手に呼び 一鶴
 風船屋無理を言う子へつきける 香雄瑠
 風船の色でもめてる子 沢山 白帆
 親も子も風船一つづつ 貫い 幽谷
 人波へ風船いとも無表情 岳詩
 風船は空の広さへ逃げてゆき 一傘
 子に風船親は試食で買わされる 晃康
 避妊薬の広告風船貰うて来 むじな

売り出しに風船派手にふくれて 兼治郎
 風船のような男がくしを当て 雄声
 満員車子は風船を抱えて 居忠三
 風船の様な夫を頼りにし 南宗
 風船が景気呼んでる村祭 好子
 風船へ神経痛の葉の名 芳仙
 繋がれた高さで昏れる^{アドバルーン} 穂波子
 背なの子をほめて風船一つくれ たけお
 風船の行くえを見たら酔った^{ババ} 罔男
 風船に似た脳味噌でよく怒り 半休
 風船を握って迷子泣きじゃくり すみ江
 婆さんのたつきが風船売る名所 光郎
 風船を貰いによその子抱いて^{ゆき} 愛場
 風船にラッシュ^{ニューアワー}と言う不運 春雄
 現金で買うたで風船二つくれ 旭峯
 風船を飛ばす予算もありません 満秋
 若いババ風船照れくさ^{さうら}に持ち 保美
 宣伝の風船だけは派手に揚げ 庸佑
 風船を飛ばすとマーチかな^{でられ} 華甫
 風船のもう一と息をババに借り 惠二朗
 宣伝の文句が風船気にくわ^ず 雄々
 恋人の吹いた風船貰うとき 虹要
 禿頭が暑^{あつ}空のアドバルーン どんたく
 倅な風船二人の息を呑み 惠二朗
 風船の翔ぶ青空を追うテレビ 葉光
 はぐれたらアドバルーンの下ときめ 八九寸
 売り出しの風船迷子持って泣き 白溪子
 風船の流れを交える風が出る 銀子

風船のどれもよめく型に出来 不二
 風船を飛ばしてこもビルが建ち 三林坊
 風船がミス日本の手を離れ 鶴汀
 風船よゆれてほしい夏の風笑 太
 風船はどこで落した背で眠り 晓明
 ふくらんだ風船ママの息を借り 一休
 デパートの風船戎橋往き来 三四郎
 四天王寺孫の風船もたされる 蘭
 事故現場無心に風船ゆれて居る 罔男
 風船のニグロほん^とニグロに似 七面山
 置き薬飲まず風船だけもらい 狂二
 紙風船富山の葉米た知らせ 保夫
 風船が斜に逃げたビルの窓 九呂平
 風船が松の鴉をおどろかせ 卯之助
 手を引いた子の風船に歩が鈍み 十九平
 風船を欲しが^る坊や一人はし 雄声
 風船を子無し夫婦へも渡し 初甫
 富山から紙風船を置いて行き 進之助
 佳吟
 風船がはりきるように乳がはり 夜潮
 風船を貰えば用のない売場 鶴汀
 風船のふくれた文字を姉が読み 鳴恍
 風船を飛ばし啞生の児が騒ぐ 慈雨
 生き物の様に風船飛びたがり 漫歩
 ライバルに挑む風船吹き破り 美音子
 アドバルーン我が家の上に顔を出し 新石
 パンクではない風船が割れ^{ました} 不二
 軸吟
 アドバルーン田舎の町をたよりなく 湖山



(記事参照)

句碑

▼大阪市民文化祭第十回川柳大会が十月十九日午前十一時から毎日新聞社三階大講堂で開催され本社の麻生路郎主幹は「大阪と川柳」と題し講演された。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は十月三十一日午後六時半から親和クラブで開催。▼市文化祭参加大阪市内通局川柳大会は十月二十八日午後五時から市交通

東洋樹氏句碑除幕式も併せて挙行される。兼題友情・曲物・裏面・絶望・日向・好感・転動・誘惑・風船・野菜・言歌特別題子持杉。各題三句。▼市川市文化祭川柳大会は十一月三日(月)正午から市川市八幡葛飾八幡宮内市民館で開催。兼題婚約・米・顔・里見八犬伝・はればれ各題三句。▼川柳文化祭京浜大会は十一月三日正午下谷公会堂で開催。兼題雲の上・あてつけ・とんでもない・天才・母校・先着・無鉄砲・不器用各三句。主催川柳人クラブ・横浜川柳懇話会。▼川柳三樹会(山梨県)発足記念川柳大会は十月十九日(日)正午から市川本町駅前福金楼で開催。▼葦川柳会(島根県)創立六周年記念句会は九月二十八日島根養蚕所日本間で開催。▼川柳備前支部(岡山県)句会は九月二十一日(日)横山一声居で開催。▼川柳岡山支部(岡山市)句会は九月二十日(土)岡山鉄道局第五寮広間で開催。▼川柳倉敷支部(倉敷市)句会は十月五日榎原一善居で開催。▼川柳維明和病院支部(西宮市)研究句会は十月十二日新明和興業KK和室で開催。▼竹原川柳会(広島県)句会は十月五日浜本泡浪氏古稀祝賀を兼ねて開催された。▼川柳出雲支部(出雲市)句会は十月十四日夜竹内李朋

氏結婚祝賀を兼ねて開催された。

句集

▼句集川柳町(第三輯)が九月十四日第十回西日本川柳大会を記念して弓削川柳社から刊行された。B列6号・非売品。

句碑

▼げんこつ社育ての親の速木真珠洞氏(福岡市)の川柳句碑除幕式が十月十三日正午、福岡市東油山の中阪に九州各地の川柳作家百余名の参加者を得てはなばなく挙行された。引きつづき野だての茶会の風流をまねて記念川柳会が盛大に開催された。句は「ゆるされた水が水車の下で澄み」▼前田伍健氏(松山市)の句碑が十月十九日同市道後石手寺保存会の手で建立されると。句は「鎌倉のむかしを今に寺の鐘」同氏の句碑はこれで七本目である。

消息

▼若本多久志氏(西宮市)は十月四日東京インターナショナルライオンズクラブのアジャ地区大会に出席された。▼前田俊郎氏(東京都)は台風二十二号がもたらした豪雨の被害で風呂場と物置を潰され庭一面泥の山となり出口を塞がれ辛うじて小窓から避難する有様で、怪我のなかったことが何よりであった。▼羽佐岡柳葉氏(ホノルル市)からの寄信に、「布哇は十一月の総選挙を控えて

上下院議員市参事会等の各候補者が出鱈目の口公を並べ立て毎夜てんやわんやの大演説を催しています。候補者の宣伝ビラが所嫌わず貼り付けられ市街の美を傷つけています。兼て市の美観を叫ぶ政府のお偉方も此の度は醜態敷の人人と有り様です」と。▼丸尾潮花氏(大阪市)は十月二十六日岸和田市宮本町会館で開催された岸和田市民川柳大会に川柳代表選者と

柳界展望

句会
▼本社句会 十月二十八日午後五時から市交通局病院五階サニールムで開催。
▼コクヨ川柳会(大阪市)句会 は十一月七日午後六時から天王寺区の下寺町二丁目市バス停前の光明寺で開催される。新しく推薦された三名の新撰者が次々と登場される檜舞台の句会へ一人でも多く御出席されたい。▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)句会は十月二十一日午後七時半から南区三休橋南詰中島小児科診療所楼上で開催。
▼大阪通信病院川柳会は十月二十七日午後二時から五階会議室で開

十月二十八日午後五時から市交通局病院五階サニールムで開催。
▼コクヨ川柳会(大阪市)句会 は十月二十四日午後五時半から黒田国光堂で開催。以上路部主幹出席。▼川柳鳥取支部では鳥取市制七十周年記念川柳大会を十一月三日一時から鳥取市智頭街演第 一生命ビル三階会議室で開催。特別課題発展兼題伝統・名勝・駅前・新開地会費五十円。
▼川柳下関支部句会は十月十九日下関駅会議室で開催された。▼第三回四国川柳大会(愛媛県)は十一月九日午前九時より愛媛県周桑郡丹原町西山興隆寺で開催。三条

▼川柳備前支部(岡山県)句会は九月二十一日(日)横山一声居で開催。▼川柳岡山支部(岡山市)句会は九月二十日(土)岡山鉄道局第五寮広間で開催。▼川柳倉敷支部(倉敷市)句会は十月五日榎原一善居で開催。▼川柳維明和病院支部(西宮市)研究句会は十月十二日新明和興業KK和室で開催。▼竹原川柳会(広島県)句会は十月五日浜本泡浪氏古稀祝賀を兼ねて開催された。▼川柳出雲支部(出雲市)句会は十月十四日夜竹内李朋



して出席された。▼八木摩太郎(堺市)高崎雄声(堺市)両氏は十月十七日南紀白浜温泉に同行され「海女だとは見えぬ可愛い紺紺」摩太郎「秋雨に煙る三段壁もよし」雄声の句信を寄せられた。
▼品川陣居氏(東京都)は東京都

杉並区阿佐谷四丁目九六、河北病院別上病棟一号に入院された。

▼国弘半休氏(宇部市)は長男には嫁を、長女は嫁にとそれぞれ身をかけたためさしたものでしばらくは心配もなく一そう川柳に親しまれることと内心よろこんでいますとのこと。

▼並木東田樑氏(ホノルル市)は麻生護乃先生からの富士と桜の絵葉書に四千哩彼方の故国を偲び娘道成寺の舞台まで聯想されて異状な感銘を受けられ「日系人富士と桜とお茶漬」との句信を寄せられた。

▼水松東岸氏(岡山県)は九月始め会社で事故に遭い右手人さし指を切断、加療中の由。

▼出原真奇氏(笠岡市)は骨折で療養中の由。レントゲンの結果は尚三カ月はコルセットを取れないとのこと一日も早い全快を祈る。

▼竹原川柳会(広島県)では十月十九日毎月の例会ではあきたらず何か研究会をとの会員の要望に応じてお互いの研究課題を松井可笑氏居に持ち寄り勉強されることになったと。

▼福田丁路氏(高槻市)は九月二十八日姫路市郊外の塩田温泉に遊ばれ「湯上りの散歩へ各月つきまとい」の句信を寄せられた。

▼川藤堂氏(西宮市)は十月六日天下の名勝天の橋立に遊ばれた。

▼野村味平氏(加賀市)は十一月



(前号記事参照)

三日第一回加賀市文化祭画賞展の準備に忙殺されていられる由。

▼松江梅里氏(大阪市)は麻生路郎主幹と共に十月十四日奈良県竜田川畔本つる家へ招かれ西辻竹青、木谷竹莊氏等と竜田川の楓樹を前にして歓談された。

▼木谷竹莊氏(大阪市)は十月二十五日播州赤穂へ旅行された。

▼高沢一浪氏(新発田市)は八十余才で視力いよいよ減退新聞雜誌類が読めず路郎先生はじめ諸大家の玉吟大名章の拝見不能となり困っていますとのこと、目下は長寿法を研究されていられる由。

▼水松道雄氏(八代市)は十月北海道へ旅行された。

▼橋本幸男氏(大阪市)は十月中旬結婚箱根へ新婚旅行された。

▼木谷竹莊氏(大阪市)は九月二十二日二人目のお孫さんを得られた。

▼小川静観堂氏(伊丹市)は敬老会から案内をもらったが自分はまだ青年のヒネた位にしか思っていないのでおかしうて欠席したとエライ元気、なお先般令息が華燭の典を挙げられたとのことお慶び申上げる。

▼岸南柳氏(大阪市)は九月二十九日理髪店開店五十周年に際し、大阪理髪界の大先輩として岸さんよろこびの会が羽衣荘で催された。

▼前田伍健氏(松山市)は同市の注文で「伊予ミコシ音頭」を作詞された。作曲は中野忠晴氏。

▼故福田山雨樓氏の未亡人福田清美さん(横浜)からお孫さんが産れたとの嬉しい便りに接した。

▼大森眞句楽、橋原竜泉両氏(岡山県)は九月二十日、吉永町町会議員に立候補され、両氏ともに目出度く当選された。

▼弘津柳慶氏(柳井市)は日本専売公社柳井出張所経理課長に栄転され柳井市へ移られ文字通りの故郷に錦を飾られた。

▼羽佐間柳葉氏(ホノルル市)はオアフ島ワイマル地区に転居された。

▼木村千容氏(倉敷市)は倉敷市新川町一〇〇一番地に転居された。

▼十月号3頁目次中青風春とあるは響風君の誤りに付訂正。

▼十月号10頁三段2行目芸術新潮を週刊新潮に訂正。

▼十月号10頁四段25行目北条誠とあるは北条秀司の誤りに付訂正。

▼十月号16頁須崎豆秋論(3)を(2)に訂正。

▼十月号34頁三段28行目日本調子とあるは水調子の誤りに付訂正。

★常任理事会
十月二十五日
(土)午後七時
南区三休橋南詰
西入中島小児科
★新会員紹介
十月
村山静修氏(大阪市)正会員
潮花氏推薦
(多)

不朽洞
会から
診療所階上で開催
議案は十一月十六日の不朽洞会
総会役員改選の件其他

お買物は…
清く
美しく
美しい



大阪梅田・水曜定休
阪神
電大代表(36) 1201

いのちある句を創れ



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 十月句会 (大阪市)

10月7日 午後6時

会場 光明寺

空澄み気澄み頭澄む——秋。作句シ
ズンとあって、出足はすこぶる好調であ
る。東京の石居高志、新潟の高野むじな
両氏の遠来組も元気な顔を見せてくださ
る。ついこの間までは、出句締切ごろに
はまだ太陽の光が、会場の庭園の青葉を
見せていたのに、もう外は黒一色の秋の
夜である。

中島生々庵副主幹の柳話から十月の会
が開かれる。まず昨年(の)十月句会には、
思いがけない路郎主幹のご発病という、
暗たんとした中で、主幹の病状を報告さ
れた氏とはうって変った今夜の明るさ。
——ああ、もう一年か、という感慨こも
る声があっちこちである。

医博としての氏の苦心談も、きょうは
和気あいあいの川雑の家風にとけ込んで
終始笑って話された。子の育て方と御飯
の炊き方の類似点を興味深く語られ、こ
れは、世のお母さん方にも聞かせたいと
思った。

主幹が披露される前、すこし時間があ

るからと、久し振りに約三十分の柳話が
満場をよこせばせた。

主幹の高商時代のクラス・メートの会
の模様を、若き日を追うように時々天井
へ眼を向けながら、実に楽しそうに語ら
れた。五十年も以前のことであろうか、
当時のお写真をゼヒ雑誌にもほしいと思
った。旭堂南陵師の紹介で入歯をされた
こと、雑誌「雪」時代の同人の逸話など
ここでも昨年とはちがった先生のお元気
さに、日頃のご養生もしのばれるのであ
る。柳話がすんでから待望の「家風」が
一句一句読み上げられていく。不朽洞杯
をかけた最後の一句は不二田一三夫氏の
作品であった。

(F)

- 出席者—路郎・彗星・須賀太・圭井堂
・清潮・一三夫・奈良子・十悟・句念坊
・笛生・生々庵・三司・潮花・黙平・文
秋・葉光・伸生・亜鈍・文蝶・省三・摩
太郎・木客・むじな・半歩・昌男・武助
・井平・旅風・多久志・青風・貴山・高
志・いわを・千里・蘭・義弘・漣・雄声
・新石・楽天・博也・葉乙女・雄峯・悦
子・鶴汀・庸佑・高史・栗・一十・狂
二・進之助・堰子・薰風子・好郎・いさ
む・静馬・木堂・メ女・知恵・保美・清
人・南宗・舟遊・晃・六童子・凡茶・柳
宏子・白木・利武・さぎす・牧人・す、
む・繁雄・土佐太郎・与呂志・淡舟・梅
志・月都・宏子・葎乃

兼題「家風」 麻生路郎選

家風にはなかつた事で嫁いじめ 失名
家風として無く共稼ぎ朝寝する 失名
家風という美名で嫁をよく使い 岳詩

- 家風くちの家の風と比較する 夢路
玄関に入れば家風が匂うて来 寿栄
パン屑も拾う家風に育て上げ 梅志
武家だった家風を父は棄て切れず 幽谷
葦草を干して家風を子に伝え 岡甫
豆蒴も家風に合わず嫁で無事 美舟
戦災へ家風も共に焼け出され 宏子
めえをたく家風は暗い台所 栗
金出来て家風のかかるのも可笑し 舟遊
家風とは妻も道具に過ぎぬ位置 鶴汀
家風が負けて 姑別居する すむ
骨董と家風をおやじ大切り 静馬
長男の文科が家風先ずみだし 晃
家風を持ち出し調停委員に笑われ 一十
家風にあわず都会で世帯持ち 木堂
チョンビリと家風が残る三カ日 井平
行水も順番きめてある家風 雄声
屋根に苦生やして家風守り抜き 千里
成り上りだから家風のやかましく 狂二
握ったら絶対出さぬ家風なり 晃
家風克く守って養子青白し 静馬
こんど来た養子家風にこたれず 堰子
親同士家風が合うと乗気なり 岡男
落ちぶれてからの家風をいどがり 博也
社風ともなつて家風はゆるがない 貴山
御家風か知らぬが鼻でもしられ 阿茶
その家風庭の手入れも行き届き 岡男
しきたりに反いて娘灯に泳ぎ 薰風子
うちの嫁どこまで家風替えるやら 六童子
元日を古い家風が落着かせ 悦子
仕舞呂家風を守り通す母 薰風子
ばあき死んで家風のよきも知り 葉光
家風どころか道徳教育反対し 博也
美しい女中家風に合いませぬ 昌男

- 持参金が来るので家風言わなんだ 文蝶
しばらくと養子家風へ逆わず 義弘
御隠居が死ぬとき家風もってゆき 多久志
後添えに家風の方が少し折れ 清人
信仰の自由家風を歪めさせ 圭井堂
やかましい家風も恋人承知です むじな
大根もこの家風で漬けられる 漣
女房から女房へ家風うけつがれ 潮花
洋閣から古い家風が崩れかけ 省三
氏よりは育ち家風の奥ゆかし 蘭
家風にそむいた子供の世話になり 月都
家風とはこうも粗末を食い 一傘
御家風はどうかと仲人口上手 句念坊
お家はん達者で家風ゆるぎなし 奈良子
敗戦で家風を言わぬ父となり 義弘
れんめんと朝の茶粥をまだ続け 雄峯
紺のれんひやりと家風感じさせ 堰子
箱架けた家風が徐々に電化され 一三夫
低姿勢を祖父の代からうけついで 路郎

兼題「日帰り」 川村好郎選

- 日帰りで結ぶ江戸の灯浪花の灯 一傘
日帰りの温泉汗をかいただけ どんたく
日帰りの娘へ話まだつきず 幽谷
日帰りの旅がやつの医者稼業 阿茶
日帰りのつもりを係にひらばられ 阿茶
日帰りへプランを一つ残して来 舟遊
日帰りの筈が南地の二階に居 摩太郎
日帰りのプランで女承知させ 高史
日帰りで弁当持参願います 貴山
日帰りと見たか宿引背中むけ 文蝶
日帰りの出来る故郷で無沙汰する 漣
日帰りの出る約束の里帰り 進之助
日帰りで行く温泉も疑われ 満秋
日帰りが一泊になる出来心 文秋

けつきよくは日帰りになる積立金
 日帰りのプランも楽し共稼ぎ
 集金がよらず日帰りも出来ず
 日帰りの出張屋をぬきにする
 日帰りへかえりの汽車も立つま
 日帰りの旅でよかつた海の事故
 積立てのバス日帰りの家族つれ
 日帰りをくたくたにしてバスが着き
 日帰りもたのし旅の紙コップ
 日帰りをするには惜しい秋日和
 里親の情に日帰りくすれかけ
 日帰りの旅にも義理という土産
 上客の方が日帰りしてしま
 日帰りへ宿坊高野の朝を褒め

兼題「小鳥」 丸尾潮花選

退院へ小鳥の籠が一つ増え
 鶯を聞かせてドラマ春になり
 ひなかえす小鳥へ家中気を配り
 鳥籠の恋へ斗病目をつぶり
 欲のない顔が小鳥を見て飽かず
 大胆な恋を小鳥がまともに見
 小鳥飼うことが女中の気に入らず
 放たれた小鳥に空が広すぎる
 青空も見せて小鳥を窓につり
 鶯へ卵生みまつかと訊かれ
 月掛の小鳥を猫にとられたり
 餌一つおいて小鳥を罠にかけ
 騒がしいキャンに小鳥眠られず
 買入れも出来ず暗い小鳥籠
 薬引だけ上手な小鳥哀れなり
 落ちつかな俺が小鳥の目に追われ
 カーバイト焚かれて雀おちけず
 うかつにも小鳥もらて叱られる
 鳥好きのどこか一茶に似た孤独

舟遊 博也 亜純 博也 梅志 水堂 進之助 いさむ 三司 悦子 利武 多久志 柳宏子 好郎

奥さんの留守が淋しい小鳥の目
 貯金箱もうカナリヤが買える頃
 安住の籠を小鳥は喜ばず
 小鳥買うことを細君承知せず
 巣ごもっているのに餌を忘れられ
 ひとり居て小鳥のほかに音がせず
 カナリヤの声もうれいひと待ち
 御見舞に行けば小鳥のことばかり
 小鳥飼う予定で猫は捨てられる
 雲切りを籠でなく程雲雀慣れ
 鶯を鳴かす鼓の緒を締める
 産め殖せ枝へ巣箱を吊つてやり
 留り木にもう座がない十姉妹
 雨脚をみてる小鳥の眼が深い
 開われた女のように小鳥生き

兼題「底値」 八木摩太郎選

底値をば妻がやいやい言うており
 この辺が底値でつせえ買わせる気
 まだ下ると底値へ手を出さず
 底値だと言うから安い気にもなり
 買時の底値と叩き屋売り急ぎ
 あんまり安過ぎるから買わんとこ
 札束を見せて底値をまだ割らせ
 だまされた底値の株で家も売り
 安おます底値だつせにり込まれ
 底値から値上りの待つ長い事
 じり高へ底値を買うて気が強し
 買うときはなはれ底値だつせと売上手
 底値にもニッコリ浪速の土性骨
 まだ下がりそうな底値をねらう株
 底値より下って株屋顔見せず
 恩着せるように底値を知らせて来
 よつぽどのとき底値の米を売り

博也 須賀太 雄声 博也 美舟 水客 牧人 阿茶 葉光 井平 黙平 水客 潮花

今買えば儲かる事は知って居る
 底値だと言うに月賦しろとい
 これ以上下りまつかと売りつける
 底値株買えば会社がつぶれて居
 底値底値底値の底がまだ続き
 小商人底値へしばし店を閉め
 どんどんと下る底値を掴まされ
 北浜の底値あとから聞いた愚痴
 ストックは底値手形の日は迫り
 ダンピングうちの底値を又崩し
 お買い時ですと底値の事に触れ
 底値の二割引けとはあほらして
 それ見たか底値の株がはね上り
 しようもないも底値につられて来
 素人株は底値をあぶながり
 底値でも買えせんデレビジョン
 値上りで儲け底値でまた儲け
 銀行管理株も底値に息を入れ
 病みつきは底値で買えからの事
 せかん金あつたら底値や買えとき

席題「悪友」 西尾 栞選

悪友もかしまつて目出度い日
 悪友と知らずサーピス良いワイフ
 悪友やなど誘い合つて仲の良さ
 悪友は悪友なりの義理があり
 悪友になつてあやまるべし押し
 悪友が帰れば女房むき直り
 悪友が保釈の金を積んでくれ
 悪友にタッタ一つのよいところ
 悪友の祝辞は過去を振り返り
 悪友がきょう受付のモーニング
 新婚へ皆悪友になつてやり
 メモ破るとき悪友の眼が笑う

雄峯 利武 高志 三司 生々庵 鶴汀 黙平 凡茶 牧人 圭井堂 清潮 進之助 閑男 清人 木堂 善風 省三 摩太郎

悪友より一枚うわ手だった俺
 悪友を意識していて手が切れず
 悪友ねエと如才なくつねり
 悪友にこわごわ河豚を食べさせ
 悪友のあとからひきまよつて行き
 利用するだつて悪友と言う呼名
 悪友の知恵を女房はもう気付き
 悪友の義理の固さに泣いて妻
 悪友になり奥さんの顔を立て
 言訳の知恵悪友に教えられ
 悪友にせんじ薬も教えられ
 悪友も恋には弱き男なり
 悪友へ妻は皮肉のありつたけ
 箒立てといつて悪友もう上り
 悪友をかばうオイラも親無し子

席題「鏡」 友淵貴山選

鏡掛け嫁の気持のそのまんま
 鏡思えらくこの娘縁遠し
 ネットタイへ朝の鏡の端を借り
 処女でない顔がうつった宿の朝
 出勤の鏡へ秒針休みなく
 倦怠期鏡かけなど変えてみる
 偽のない顔朝の鏡見る
 振袖へ三面鏡は燃えるよう

文秋 潮花 黙平 一三夫 高志 好郎 生々庵 栞 連 与呂志 多久志 牧人 清人 雄声 文蝶 潮花

大入がゆれる 栗屋の大鏡 三司
 三十娘の吐息に鏡が又曇り 須賀太
 忙中鏡相手に鼻毛抜き 句念坊
 待ち切れぬ声が鏡へ呼びかける むじな
 はしたない心鏡に覗かれる 昌男
 鏡だけがほんとの僕を知っている むじな
 秘めて嫁く過去は鏡になだめられ 昌男
 泣き顔をうつせば鏡冷めたすぎ 博也
 もう嫁げ嫁げと鏡言う如し 白水
 写るものみんな鏡にする女 六龍子
 鏡台のつやもうれしい御良縁 清人
 次の間の鏡へ女立ったまま 貴山

席題「深夜」 金井文秋選

丑満を巡れば牌の派手な音 圭井堂
 バタ車生さる夜底へ軌む音 六龍子
 恐縮な声で深夜の医者送り 義弘
 決算期庶務も深夜の灯をともし 省三
 梯子酒深夜の街へ唄い出し 速
 みちくしとくく聞いた酔い心地 生々庵
 深夜業ベルト不気味な音を立て 仲生
 深夜放送コソコソと聞き いわを
 深夜から霜ふんで出る釣の味 清潮
 シグナルの青き深夜の通過駅 笛生
 ビル街の深夜に田舎者おびえ 一十
 深夜業夜泣きの湯気を呼びとめる 潮花
 運転手深夜の客を恐る乗せ 文蝶
 残業の靴は深夜へはばからず 木堂
 闇の底に眼がありそやな夜の道 晃
 真夜中やないか妻のヒスなだめ むじな
 警笛は深夜のビルの霧を這い 潮花
 起こされて深夜メーターに酔もさめ 環子
 待つ妻に深夜の靴音遠さかり 半歩
 湯の宿の酒は深夜もいとわな 保美
 御近所を気にして深夜戸を叩き 牧人

川維 ハワイ支部句会 (ハワイ) 築山快夢起報

手術して深夜を意識するベッド 保美
 大作家夢みて深夜書きつづけ 奈良子
 監切が捕物帳を眺む深夜 須賀太
 たしかめて深夜の帰宅鏡を開け 葉乙女
 深夜ふと俺の寿命を考える 多久志
 黒い影深夜を無気味にきして消え 南宗
 (庸佑清記)

云い過ぎた後の晩酌ほろにがし 魔花麗
 云い過ぎの言葉が我にはね返り 砂丘
 過去は過去ただ十字架へ跪つき 暁舟
 親の過去娘の良縁に又障り 草一郎
 白紙には戻らぬ過去の日を悔いる 柳葉
 国訛り過去の稚心がよみがえる 迷朗
 人知らぬ過去を良心ちくり刺し 快夢起
 過ぎた子と言われ親馬鹿罵しり M子
 夢抱いて其まま過ぎし五十年 紅茶
 古里の灯がなつかしい駅を過ぎ 泉木
 過ぎ去った昔の夢も亦染し 気七有
 若き日の夢はやっばり夢だった いつ生
 飲み過ぎた朝は病氣と社へ届け 虹橋
 過ぎ去った事は云々と手で抑え 浅太
 早過ぎた暮に役者の大あわて 弦月
 気が乱れ薬をも掴む過去を悔い 周防
 過ぎ去った事は云うまい諦める 笑流
 行過ぎた美人へ尾がつき鱈がき 八丁堀
 過ぎた夢追わず貧乏立てなおし 押山
 女盛り過ぎるあせりの隙だらけ 北海
 過ぎた事また繰返す母の愚痴 美潮
 飲過ぎを妻が黙って見る 痛さ 舞平
 過ぎし日を日記に探す秋の夜 舞座
 悴には過ぎた嫁女と姑褒め エス子
 議論好き過ぎたるあとの悪い味 緑星

川維 淀川支部句会 (大阪市) 武部香林選

年老いて帰らぬ旅に友は 逝く 皇の山人

脈細し最後の我儘聞いて やり 句念坊
 わがままで困りずの目を細め 灯子
 わがままも親ゆずりなり 既弱なり 三司
 調べ室わがまま育ちちじこまり 六龍子
 わがまま云えば見さん例に出し 幽谷
 わがままを通したる味気なき 若菜
 陳情に来て盛り場も見て 婦子
 盛り場の空気が呼吸がつまりそう 三十郎
 盛り場の朝下駄履いて通り抜け 栄光
 盛り場の巡査便所を尋ねられ 花村
 アルバムのグループみんな母になり 文兒
 旧姓のままでグループ語り合い 東洋男
 グループの顔ぶれ妻の気に入らず 水堂
 グループを路台にしてふりむかず 香林

川維 阿倍野支部句会 (大阪市) 金井文秋報

同窓会先生のあだ名つまみ出し 仲生
 雲助のようなあだ名も釜ヶ崎 晃
 呼びやすい渾名をつけた子沢山 繁雄
 九官にまでもあだ名を覚えられ 豆秋
 半身不随神にも似たる妻のあり すむ
 半身像先代様にヒゲがあり 太路
 半身をかくし可愛いかれんほう 増美
 案内を舞妓にたのむ京の旅 奈良子
 案内に無縁 仏も押まされ 舟遊
 ライバルへ祝えと案内状が来る 葉光
 いねむりをまぎらと床に寝払い 進之助
 父ほやき母いねむりってのどかな日 未人
 いねむりカーンを引く社長秘書 亜純
 いねむりをしても単位だけは取り 庸佑

川維 天位句受賞者 (33年度) 句会社

- 4回・奈良子・3回・淡舟・梅志
 ・環子・省三・2回・若仙・三司・
 凡九郎・博也・南宗・水客・青風・
 圭井堂・漣・一三天・1回・陽子・
 旅風・竹荘・牧人・多久志・義弘・
 玲人・雄峯・淀月・武助・紫香・一
 瓢・栗・十悟・葉乙女・晃・美恵子
 凡茶・鴨汀・庸佑・進之助・木堂・
 豆秋・潮花・日満・昌男・きさ子・
 瓢太・いさむ・清潮・黙平・笑司・
 柳宏子・清人・★不朽洞杯獲得者
 2回目青風・1回陽子・淡舟・栗・
 茶仙・梅志・阿茶・生々庵・一三天
 諸氏。(十月現在)
- 句会社 全出席街道を
 行く人々 (十月現在)
- 淡舟・与呂志・句念坊・梅志・多
 久志・繁雄・三司・舟遊・雄声・漣
 ・潮花・いさむ・文秋・木堂・鴨汀
 ・栗・高史・進之助・葉乙女・庸佑
 ・利武・すむ・博也・永断・六龍
 子・十悟・柳宏子・いわを・旅風・
 義弘・静馬・一三天

川維 玉造支部句会 (大阪市) 徳永雅美報

嘘八百並べてピンチ切り抜ける 十悟
 頼りないピンチヒッターがくがえし 環子
 ピンチだと言うてて店を改装し 文秋
 ビンチもど八分の運に任せきり 薫風子
 酔眼に女ピンチを早や感じ 青風
 スラム街あだ名のまんま葬られ 一三天

実力がついて子供もままならず 栄治郎
 実力をそなえ人気が持ちつづけ 文秋
 実力のない学歴が巾をしめ 清子
 実力を出ず間も社がつぶれ 井平
 来月号もう古木屋にある 早さ 柳宏子
 専門に診せるとすぐに切開りたがり 一栄
 飽借りても専門程切れず 白柳子

川維 にしなり支部句会 (大阪市)

後藤梅志選

番台が交替り言伝てまで 変り 柳宏子
 番台にも謎の女としてうつつり 薫風子
 偉大なるヒツ子供のあとへ掛け 蘭
 自信あるヒツ子がタイトばかりはき 菁風
 餌のある檻が猿には不満なり 舟遊
 猿智恵を受えず猿の檻に佇ち 杏花
 オリの猿へ終日雨が続きなり 満潮
 この家も腕白が居るボロ 障子 清人
 腕白もやさしい母に丸められ 雄声
 腕白の子がいて猫もよう肥えず 牧人
 スナップの位置をこもり変えた秋 歌子
 細繩を張る山道は匂つて 太路
 金話りの秋と新語が出そうなり 文秋
 一輪の菊が車内を秋にする 速秋
 台風もそれてみのりの秋たしか 五色
 停年の身を秋風が吹き抜ける 晃
 果物屋鏡の中も秋の色 北州
 恩借を返す間もなく借りずまい 悟朗
 遊んでる金もねんでと被せる 眉木
 菓子折を添えて恩借返しに 来多
 恩借のそれから肝胆照らす 伸久
 恩借をかえせかえせと虫が鳴き 淡海
 貯金しておくと説教されて借り 敏子
 誰を刺るまわりを秋が往來する 梅志

川維 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

聖なる使徒は一番高い色がらす 紫蘭
 朝陽夕陽聖なる屋根の三角に 幸男
 雑役を叱るに社長過去を云い 古要
 雑役に甘んじながらもものを識り 親生
 雑役の半日釘を抜く事に ゆきら
 シャツの腕叱られ乍ら伸ばして 鳥雀
 宝物結局高いとこへ置き 司郎
 宝物を揮むたんびに銭取られ 句念坊
 肉体美サックドレスで偽装する 千潮

川維 明和研究句会 (西宮市)

薫風子報

弁解の出来ぬ証憑を並べられ すみ江
 弁解もせずにあかりかぶとぬぎ 誓星
 感違いのままで縁談まとめ上げ 舟遊
 感違いたとも云えずいやあそ すむ
 只取りで傍目八目くやしがり 一杯
 欠伸したとこを映画へ誘い出し 園男
 級長の欠伸に教師気がとがり 薫風子
 恋ゆえに欠伸こらえたクラシック 風遊
 お通夜の欠伸便所へ持ってゆき 川村
 お茶漬で済ませ化粧に念を入れ 寿栄
 湯上りの浴衣へ河原鳴いており 三舟
 姿まで父そっくりに着る浴衣 張月
 残業へ妻は浴衣で迎えに 来川
 借金をみんな返した日の浴衣 夢路

川維 弓削支部句会 (岡川県)

直原七面山選

嵐にもめげず出かけるランデブー 夢太郎
 修学旅行が降りて嵐が去つたよう 水雲
 人生の嵐へつづく夜の雨 美沙
 人生の嵐に耐えて今日の地位 童児

川維 備前支部句会 (岡山県)

三村柳風子報

筆跡を読めないままに大事がり 知恵美
 書き置きのこでためらう筆の跡 伊久野
 工作に牛乳瓶も一役し 永流
 オハヨーと牛乳瓶が待つており はるえ
 牛乳のしずくは顔へ塗つておき 陽子
 無事だった夜警牛乳ラップ飲み 昌昌
 鬘髪をいれず反対立ち上り 三六
 収入を聞いて反対折れて来る 龍泉
 反対が苦勞する身の鞭となり 万女
 汽車の旅広告にもあいて来る 秋月
 広告を兼ねて中元届けられ 美音子
 広告のマッチで年中飯を焚き 幽谷
 人情の薄い故郷を捨て切れず あやめ
 未亡人 人の情も警戒し 一声
 人情の薄さに惨む曼珠沙華 夢城
 どん底へ人の情が身にしみる 浄美
 豊作を約す暑さは苦にならず 柳風子
 花見にも最後の味は水が良し 幸仙

川維 倉敷支部句会 (倉敷市)

梶原一善選

大げさに水鉄砲を逃げてやり 東岸
 水車曲いて田舎が出来上り 正洲
 酔いざめの木は蛇口へ囁りつき 清春
 官能をざりとえぐるロカビリー 万古
 失敗をやさしく論ず過去があり 春日
 細君の勝負隣と附合えず 一善
 どん底をやつと勝負でおし通し 麗水
 新調のモード髪取つて見たくなり 銀子
 オートメイショウ今朝からボク押したけ 素身郎
 誘惑へたもとを無くして来た勝負 桂月
 ロカビリー調で女房にどなられる 平々
 失敗を重ねる夫へまだ望み 狂風
 ハンサムが何さと妻が云うてくれ 船坊
 ハンサムだと云われてうかと思ひ 真奇
 ハンサムがとうとう妻にして仕舞い 隆文
 これだけの失敗姑が大きくし 葵丘
 ハンサムへ主人が居るを忘れ 幽谷

色紙短冊
 書講用品
 大坂戎道
 丹青堂
 室町二丁目

肩書が出来て奥さんまで気取り 陽子
酒のんでロカビリーな目もくれず 創七
ハンサムが来たので常連無視される 萌芽
男にはハンサムおごつては呉れず 春也

川雑 小松支部句会 (小松市)

伊藤茶仏報
うっかりと云った噂に尻ひれつき 吉枝
うっかりと妻の速達出し忘れ 正明
うっかりと出前桃色見てしまい 光郎
反抗期うっかり云えば手に負えず 多恵子
電話口ハイ居りますと言つちまい 千太郎
招待券日付の過ぎたのを渡し 宗太郎
実力の差へ惜しみなき此の拍手 生風
実力の前に意見がふやけてき 城南
実力の差を人前で侮られ 茶仏
口先でまるめた女にあるゆとり 松木
滞納をしても妾宅 建つ世相 一進
娘云う世相は何もかも甘し 香径
テレビの続きへ子等の箸せはし やすえ

川雑 岡山支部句会 (岡山市)

津田麦太楼報
風鈴とすだれ二男の日本趣味 葵丘
蓮根をひと節新婚買うて 去に 幽谷
べんちゃらへ本気にならな若旦那 陽子
酢蓮根ロマンのよくな味を持ち 万女
美しくなつて襟替急がされ 東岸
白状なさいと引揃いたり抓つたり 矢寸志
おべんちゃら云うけ言つてさつ去に 麦太楼
襟あしをじつと見つめる片思い 一声
襟足の白さへ慕情捨て切れず 美音子
襟垢をためてアロハは酒臭し 十七
無造作に開襟シャツの悔み客 半翁
べんちゃらも云つて養子は氣に入られ 秋月

蓮根池にたまの休日釣れるなり 船ン坊
外堀をプリント模様でうめた蓮根 尚子

川雑 篠山支部句会 (兵庫県)

小西無鬼選
反対に拳手して養香まだ迷い 初穂
反対をする気真ッ向に座り込み みのる
反対をまあまあまあと酒にする 一雨
警棒が来て反対の意地に燃え 永断
内職の針の穴から漏れる 愚痴 左文字
雨漏りも苦にはならない独り者 秋月
本堂の雨漏りこれでも文化財 岳詩
風切つた乗心地買うと決め ひか平
乗心地よい父ちゃんの馬は遣い 凡志
夕食で話が つきぬ乗心地 初歩
童心にかえるプランコの乗心地 雅佐女
天幕から雨が漏れてる村芝居 枝葉
明日迄が納税期で す宣伝車 喜天
歯を抜いて言葉の漏れへ気を使い 無鬼

川雑 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花選
子供連れ余分の金も入れて出る 四郎
しくじつてからは無口な娘でかわり 翠月
子の好きな嫁へ姑が目のかたき 青水
しくじつた料理をラジョになすりつけ 豊年
目のかたき風邪引けよいなと思ひ 休林
出来のいい子ほど後妻の氣に入らな 時醉痴
よにより目のかたきの娘へなほ惚れた 実男
目の軟落ちがぶれて居ても足らず 蘇人
ナイターのエラー光線のをいにする 弘道
ナイターの婦りを誘うネオンの灯 司郎
片足の親父の胸に來て寝むり 吐泉
安堵した顔で外科医を出る子連れ 九呂平
はつきりと見た火の玉を否定され 嘉次

子供連れから遊園地の昼になり 侃流洞
のし上りや近所隣の冷い目 六花
おもちゃの前をさけてる子供連れ 青山
片足は棺桶へ死にたくはなし 大作
片足の客とは知らず下駄さがし 笹舟
ナイターの暗いところからとみ次郎 藤四郎
片足も三途の川を渡つて居 佐吉
片足の團児が雨のバスをよけ 慈雨
子供連れだから危険な場所をきけ 伊佐男
ナイターの時だけラジョの馬が合い 丸平
アベックにナイターの灯明るすぎ 樺川

川雑 大聖寺支部句会 (加賀市)

野村味平選
ご用聞き好物と知つて持つて来る 浪寿
自転車をもめて見てるご用聞き 酔羊
ご用聞きまだまだ若い夢があり 一路
左前の家計をご用聞き見抜き 恒雄
先代の表札文字の色あせてとよ 光郎
表札のない家往診をまごつかせ 味平
表札の番地が同じ裏長屋 味平

川雑 鳥取支部句会 (鳥取市)

河村日満選
催促に会つて親父に相談し 栄次
相談に役人善処するとだけ 亭
保険屋が家の計算してくれる 秀和
算盤で電話のベルが鳴りつづけ 星影
久し振り里で話題が尽きぬなり 多可志
相談にいとたらない生返事 耕民
顔出したとたんに話題変えたら 三歩
汽車の旅話題が切れて眠むくなり 若人
計算の不足幹事が自腹切り 遊星
残暑の候うちわも少し破れかけ 八歩
相談をした香典のおなじ額 日満

品質優良
先カワペン
TACHIKAWA PEN
大聖寺区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社
タチカワペン
タチカワゼム
タチカワ画筆

川雑 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報
ささやきの中を米賓席につき 一机
ささやいてる幸せに陽は落ちて 十樹路
ささやきの切れ圍切れ圍に虫を聞き 雄々
ささやきの値札にささやく母親連れ 雄々
屋上のささやき憩の場所となり 翠月
ささやいた二人がそつと席をぬけ 一歩
ささやけば札束すしんとにきらされ 十七
ささやきは胸のしこりを解いてくれ 芋子
ニユーモア見てささやいてる田舎 幸子
ささやきがピタリ止つた気味悪さ 君枝
ささやきにまた負けそうなた身をのれ 天邪鬼
大声の男ささやくこと知らず 素瓢
酒臭い息で想いをささやかれ 千柳
ささやきも脇見もさせぬ試験官 奎
ささやきに笑う声だけ聞こえて来 美喜江
ささやきがびたり課長の暖き払い 吾柳
ささやきにそれほんまかと目をみはり 節枝

川雑 高知支部句会 (高知市)

川竹松風報

まさやきに似た秋風が通りすぎ 信坊
まるい手で隠す坊やの手から落ち 春子
密会のスリルを妻に感ずかれ 素有
隠くさずに申しあつら蹴られて来 寛
迷信へふと迷わされる療養期 幸
マネキンを見てからデザイン迷われ 幸陽

杏林川柳会 (大阪市)

麻生路郎先生選

水屋が隣も熱の出た話 生々庵
庶民的ですとみそれをすすめられ 小石
水木よばれそれから腰をすえ 同
鯛の洗い水も金の内に入り 阿茶
花水クラーと云う敵が出来 同
水より冷たい心もあると知り 瑞川
三味線の色気も判る年頃さ 同
寝ころんで弾かず二上り三下り 一哲
三味線が好きで姑のお気に入り 生々庵
三味線がやんでそれから首もせず 小石
三味線遠慮しながらついてき 阿茶

御機嫌の悪き師匠の酸さばき 生々庵
二上りを聞く時次郎いい男 無名林
歌謡曲も弾けて名取の貴ばれ 同
三味線をやめると劍舞飛んで出る 同
ほろ酔いの口三味線で芸妓来る 比呂史
三味と一緒では唄えぬ小唄なり 同
たった一人の三味線あちこち呼ばれ 同
細君の三味で踊って嬉しそう 一哲

南海電鐵川柳会 (大阪市)

友淵貴山報

おみくじを信ずる程の気の弱り 雄声
おみくじも笑って過す齡になり 和男
枯枝にみくじの花が咲く神社 狂二
引かいてもよいおみくじで胸ざわり 句念坊
おみくじの吉競輪に裏切られ 文蝶
おみくじの待人誰の事か知ら 狂二
夏やせか知ら隠しているツワリ 玲人
夏やせと云う事にして悩む恋 圭木
ありがたやタイムレコード故障なり 好郎
下半期姓が変わった出勤簿 武助
タイムカードせわしい肩の息で押す 晃
急停車一人助けて気をよくし 音吉
急停車すがつ腕の恥かしく 宏子
急停車わしの下駄はどこへ行た 文蝶
急停車をちよとのぞいた急停車 晃
急停車何んや何んやと窓を開け 狂二
急停車はずむ話の腰を折り 雄声
ダイヤまた狂つてしまつた急停車 圭木
急停車財布のありかたしかめる 文蝶
急停車これより先にレールなし 句念坊
居眠りが頭をうった急停車 雄声
急停車させてヨチヨチ行く子供 玲人
急停車どこまで読んだのか忘れ 同

川雑 婦人友の会有志親月句会 (大阪市)

麻生霞乃選

浜へ出て貧富わすれた月見する 女
新婚に今年の月は別に見え 徳子
深雨降らして月は澄み渡り 悦子
月見では思い出させる国の母 徳子
明月をほめてお箸が又動き 葉乙女
満月へ虫も静かに鳴いてくれ 良子
物干の月見へ家族揃う幸 小石
満月へ愚痴な心も洗われる 小石
台風一過今宵の月のうらめしく 登志子
月明り遠慮会釈もない二人 悦子
おだんごが早く喰べたい子の月見 春栄
いける口月が出ようが出よう 清子
叶えてと月に祈つた日を想い 悦子
月もすすきを活けて人を待ち 阿茶
月をほめ酒をほめてるほどのよき 清子
名月を待つ部屋の灯を二つ消し きさ子
屋台店しまうてからの月見酒 葉乙女
いざよいの月でも一度飲むと決め 良子
月の出を待つ間に虎になりかかり 一栄
騒ぐこと月はどうでもよい座敷 乃
盛り場の月は月見へ忘れられ 乃

体温川柳会 (貝塚市)

河楊梵鐘報

カマキリが早場米と厭に着き 喜好
かや吊つたまままで男部屋はから 珪子
軽装の過ぎた痴漢の目が笑い 仲平
意地悪な姑だったが一週忌 由枝子
白バイが追つて来よさな風を切り 抱亭
裸身が目立った夏よさようなら 忠太郎
鳩時計夜中の月がいつそ 牙え 英美子
ハイカーに列つくらせせて岩清水 恭介

のりかえをかねてよめてまた案じ 吉奴惠
風船が天井にいる満員車 山水
どしや降りる宿直気持よく眺め 阿季良
ラブレター書くのにペン先予備がいり 道子
農耕機かまきりキツと斜に構え 宗太
父が来て母がのぞいてつける日記 小風
コーヒーより安つくよとクラブ振り 美佐子
手放した時計の跡の秋に触れ 港雨
遊び疲れてコイさんしんどいわ 一鶴
オルガンがやんで分教場暮れる 梵鐘

たけるべ川柳会 (岡山県)

金魚飼うコツを金魚が死んで知り 井水
なめているようで一升飲んじまい 美沙
涼み台敷に攻められてさす将棋 高子
本妻をなめた二号の言葉尻 只世
ママ発作金魚の鉢を持って逃げ 一喜
相愛が秘かに待ったゴールイン 賤子
別荘の金魚は秋を淋しがりがり ちとせ
最大の好意で犬は舐め廻し 青柿
ボスの子がすつかりなめている教師 美舟

鮎と料理と酒
アベノ橋地下映画食通街
千日前 大劇裏
梅里の店
大萬
★大万川柳(第九十三回)を募る
兼題「よらめき」路郎先生選
締切・十一月十五日 (句数五以内)
発表・十一月廿一日 (店内掲示)
投句は 阿倍野区松崎町三丁目
一〇 大万川柳会宛

川柳雑誌社支部 11月の句会

所題時 27日(木)六時 ベニヤ板・信号・クレヨン 難波高架下 親和クラブ	所題時 20日(木)六時 顔・マツチ・たずね人 玉出新町通一ノ一 梅志居	所題時 19日(水)六時 校長・ハンチング・罰金 旭町二丁目 金塚(会館)	所題時 11日(火)六時 つきあい・魅力 大道一ノ二天王寺小学校	所題時 10日(月)七時 敬遠・派手 大阪信用金庫(市電玉造南一丁)	所題時 9日(日)一時 長屋・莞り出し・ハイキング 西宮市鳴尾町新明和興業K・K	所題時 5日(水)五時半 晴れ間・出口・切手 堺市老松町三丁島野工業KK	所題時 4日(火)六時 主婦・予想・お世辞 十三西之町東淀川郵便局
所題時 末日(切)投句のみ 深・乱れ髪・旅愁・告白 岡山県久米郡久米南町下弓削四 五四 直原七面山	所題時 高知句会 壁・豊年・祭 高知市追手筋湖月 川竹松風居	所題時 16日(日)夕 競合・帯・慾 四條繩手 仲源寺	所題時 16日(日)一時 遠望・砂ほこり・氣に喰わぬ 東岐波区丸尾原 平田実男居	所題時 9日(日)一時 喫茶店・おしやれ・立読み・利子 米子市公会堂日本間	所題時 9日(日)十時 わがまま・祝日・メートル法 広島市尾長町東山根角 上利居	所題時 9日(日)一時 雑誌・ローティーン・マツチ・ ブドゥ酒 水島弥生町四 椋原一善居	所題時 8日(土)一時 屋根・化粧・妬く 篠山町立町 池富旅館

▼本年の市民文化祭 川柳大会は、先生も少し遅れるが、着々完成へ近づいている。ちよっと私もお手伝いをして、楽屋から早く本になってほしいと思うほどの好句集で、晴れわたる。

▼赤ペン・青ペン・

▼杏林川柳会の方々によって、座談会「医者稼業お脈拝見」を開いていただいたが、こうズバリ医博がならぶ川柳座談会は、ちよっと珍しいのでは

▼出版といえば漫談の丸里丸氏が、「私の前座時代」という20ページの謄写誌を出したが、その奥付に、押売値段・一冊百円也。とある。

柳人交歓年賀廣告を募る

新年号へ貴方の年賀廣告を

- ★一口金二百円。幾口でも申込んでください。
- ★一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います。
- ★一口分は五分の一段組三行。
- ★原稿締切は十一月末日着便
- ★広告料は前金のごとく(郵券代用でもよろしい)

川柳雑誌社

▼「須崎豆秋論」は、本号でいよいよ豆秋作がキラ星の如くならぶ。▼あと一冊で早や新年号である。(二三天)

▼句集「三人」は予定より少し遅れるが、着々完成へ近づいている。ちよっと私もお手伝いをして、楽屋から早く本になってほしいと思うほどの好句集で、晴れわたる。

▼出版といえば漫談の丸里丸氏が、「私の前座時代」という20ページの謄写誌を出したが、その奥付に、押売値段・一冊百円也。とある。

西独クノール社より新輸入

神経痛・リウマチに...

オサドリン錠

大日本製薬

オサドリン錠は西独クノール社が多年研究の結果、新発見した神経痛・リウマチ治療剤です。その作用は確実に胃腸障害などの心配がありません。(10錠) 350円・(20錠) 650円

正本水客
黒川紫香 著
丸尾潮花
川柳句集

三人

定価二百円 送料二十四円
B列6号 二百余頁

句集刊行に就いて

路郎門の逸材、正本水客、黒川紫香、丸尾潮花の三氏が川柳精進三十年の収穫の中から特に優秀なる作品を選出し、恩師麻生路郎先生の校閲を経て、広く世におくりに、その真価を問うため川柳句集「三人」を刊行することとなった。

★五百部限定出版につき御申込は早く★御送金は川柳雑誌社の振替口座大阪七五〇五〇番を御利用が便利です(切手代用可)

発行者 川柳「三人」刊行会

大阪市住吉区万代西五の三五
発行所 川柳雑誌社

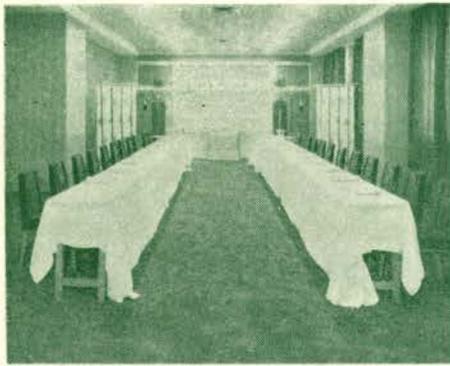
電話 住吉 六〇八八
新橋口 大坂七〇五〇番
(目下鋭意印刷中)

新しい じゆうたん

タフトン

1 帖	2.200
2 帖	4.400
3 帖	6.600
4.5 帖	9.900
6 帖	13.200

各百貨店
装飾店に
あります



大阪国際見本市会館ホテル場
結婚式

ウールタフトンが使用されています



東京門治座二階通路

住江織物株式会社
株式会社 住興

大阪・南・安堂寺橋通4 (電 2581~88)

printed in Japan

募 集

課題吟募集

- 勝気 (十句以内) 武部香林選
 - 歌手 (十句以内) 弘津柳慶選
 - 八百屋 (十句以内) 岡田夜潮選
 - 神詣 (十句以内) 尼緑之助選
 - 女店員 (十句以内) 西いわを選
 - 馴染み (十句以内) 真鍋一瓢選
- 毎号募集
- 近作柳樽 (雑詩十句以内) 麻生路郎選
 - 川柳塔 (雑詩十句以内) 北川春葉選
 - 文章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選

投稿規定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼ 『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼ 『課題吟』は誰でも投句が出来る。限る。
▼ 『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

川柳雑誌 第十三号

B列5号 毎月一回一日発行
定価 六〇円 (送料四円)

(禁轉載)
半カ年 三八四円
一カ年 七二〇円

昭和三十三年十月廿五日印刷
昭和三十三年十一月一日発行
大阪市住吉区万代西五丁目二五番
編集者 麻生幸二郎
行田順久

発行所 川柳雑誌社
大阪 大坂 七〇八八
新橋口 大坂 七五〇五

不眠 昼間療法!



日中のイライラもすぐとれる

昼間の服用だけで、夜自然に安眠が
でき、日中のイライラや不安感
もとれ、明朗・能率的な生活を送
れる習慣性のない安全な新薬です
スッキリした頭で作句の為にも!

昼はすつきり・夜はぐつすり

ノクタン錠

東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌



お酒泣かすな
胃の用心!

☆愛酒家の総合保健薬☆

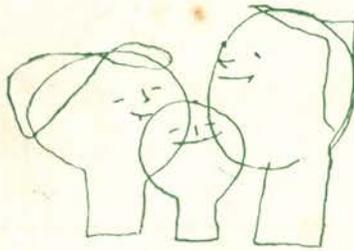
ネストンゴールド

30錠 200円・100錠 500円 他にネストン 20錠 100円

お酒をのんで悪酔、二日酔をしたり胃を害したりし
ては折角のお酒が泣きます。ネストンゴールドはお
酒が美味しくのめでも酒後の精力を増強します

G1

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓬菜

大阪なんば・TEL ⑥4551-2



IWATANI

お台所で
きつと重宝!

すぐ使える便利な
ポータブル・ガス

簡単につかえ
ていづまでも
使用になれる
マルキプロパン
は、経済的で化
かまる完全に気
する高品位ガス
を使っておりで
すから安全で、配
ガス中毒の心配
もありません。
入替ガスはお電
話1本で迅速に
配達



マルキプロパンガス

ガス業歴2年 岩谷産業株式会社
本社 大阪市東区本町 電話大阪26代表:251-8251

昭和廿二年七月一日 第三種郵便物認可
編集 廣川 柳 雑 誌 社
発行所 廣川 柳 雑 誌 社
〒大阪市西區長町四丁目五番地 電話大阪六〇八一 郵政口帳大向七九〇五
定価六十円 (税別)